329
160

始

2.7.13

18

恨多情多の後

829
160

關莊一郎作

329-160

帝國圖書館藏

柳之助とお種は此の末どうなるだらう、何だかあの儘葬つて置くのは惜しくてならぬ。私は十年あと に恁んな心持で、故紅葉氏の多情多恨を讀んだ。そして誰か其後のことを書いて見せて呉れる人はなからうかと、今日まで待ちぬいて居た。『後の何々』、終篇何々と云ふものが、丁度雨の音を聞いた蛙のやうに、彼方からも此方からも盛に出て來た。それでも柳之助とお種との消息は杳として聞えない。私の十年の希望もちよつとやそつとには遂げられさうにもない。寧そ自分で書いてみやう——私は不圖好奇心を起した。此の好奇心が、到頭私に恁う云ふものを書かせて了つた。

作者識

大正
1.12.27.
四志

後の多情多恨

關莊一郎

（一）

疑ひの門を出た其の夜から、柳之助は相變らず葉山の家へ出入りして居た。彼は牛込の物理學院から歸つて洋服を普通着に着換へるが早いか、お類の油繪と、保を抱いたお種の寫眞を穴の明く程見詰めながら、例の憂鬱な顏を顰めては煙草を喫すのであつた。彼は恁う云ふお勸めをやつてから直ぐに下宿を出て、鼻の先の葉山の家へ行つて、晩までお種の顏を見て話し込んだ。何かの都合で晝行かれない時は、夜分に出懸けて行つて、可也深けてから歸るのであつた。

柳之助が葉山の家へ行く度毎、葉山が留守でお種ひとりのことは有勝であつた。彼は葉山の留守を覗つて行くのでは勿論ないが、偶然にも然う云ふ處へ好く出會すのであつた。是が以前の柳之助であつたら。「それぢや又來ます」かなんかで、さつさと歸るのであるが、心機一轉した今日此頃の柳之助には、大好の葉山の留守も、左程失望を與へなかつた。寧ろ却つて其の顏の面に心嬉しさが漲り渡る樣な風でもあつた。そして柳之助が何時もお種に對つて、

「どうも矢張り下宿に獨で居るのは、堪へられない程淋しいです。此の間も貴婦にあゝ云ふ御迷惑をかけてお宅を出た程ですから、頻々參るのは、自分でも非常に惡いことだと思つとるです。思つとることは思つとるですが、どうも矢張淋びしいもんですから……つひ、奥樣は嘸ぞ御迷惑でせう……。」

恁んなことを冒頭にして、身の上話や世間噺や、丁ひには葉山に相談するのが順序な問題までもお種にして、一にも二にも奥樣〳〵と親しむのであつた。

お種は柳之助に然うされるのが、迷惑でないことは無論なかつた。所天のことにしてみれば、自分や柳之助を頭から信じて怪しまないから好いやうなものゝ、愚痴と取越苦勞で生きて居る隱居や、粟粒の樣なことにも輪をかけて言ひたがる女中達の思惑を考へては、お種は柳之助の顏を見る度氣が氣でなかつた。けれども柳之助にそれを打ち明けて、きつぱりと斷りを言ふだけの勇氣もお種にはなかつた。いつそ柳之助をいたいたしくも哀れにも懷しくも思ふのであつた。嘘にも自分の樣なものを奥樣〳〵と慕つて、所夫同樣に相談もかけて下さる、是もみんな最愛のお類さんを亡くした孤獨の淋しさから起つて來ることだ――お種は恁う思ふと、色でも戀でも何でもなしに、女心の一筋に堪へ難い悲哀と同情を柳之助に有つのであつた。自分の身でかなふ事ならば、何なりと柳之

助の爲にしてやり度い樣な氣にもなるのである。

柳之助が葉山の家を出てから、凡そ一ト月程は彼とお種との間に、恁うした狀態を保たれて居た。

すると或日、湯殿のそばで、

「奥樣と鷲見さんと又初つた、檀那樣はあんな人の好い方だから大目に見て入らつしやるだらうけど……。」

と女中達の立話しをして居るのを、お種は便所の中でそつと聞いた。

お種は頭から水でも浴せかけられた樣にひやりとした。そして身を顫はして恐れた。お種は其の夜柳之助の下宿へ行つて、

「鷲見さん、また女中達が私と貴郎のことを彼是申して居りますよ。是が隱居所へでも聞えやうもんなら、此の前と同じ樣に、お互ひに嫌な思ひをしなくつちやなりませんが、私ほんとに如何したら好いのか困つて了ひました……。」

と口說いた。

柳之助は、お種の此の言葉を豫め期してでも居たものゝ樣に、左程驚きはしなかつたが、流石に眉を顰めて吃りながら、

「濟まんです。濟まんです。實に濟まんです。皆僕が惡いです。僕の無遠慮から然う云ふ惡い噂が立つたのです。」

彼は油氣のない聊か縮れた散髮を抓み、然も自烈體さうにそれを引つ張りながら、

「奥樣、僕はもう覺悟をしました……。」

「えつ？　覺悟と有仰ると……。」

お種は眼を瞋つた。

「僕は遠くへ離れて了はうと思ふです。」

「遠くつて、どつか朝鮮へでも……外國へでも……。」

「いや、無論東京のうちですが、根岸へでも轉宿しやうと思ふです。」

柳之助の覺悟と言つたのは、今の下宿から根岸へ轉宿すると云ふことであつた。お種は此の仰山な物の言樣を耳にして、怨襟いうちにも噴出したい程可笑しくもなつたが、じつと堪へて、

「貴郎がたとひ根岸へお引き越しになつても、今申した問題が決る譯でも御座いませんでしよう。」

恁う詰問すると、柳之助は首を振つて、

「いや、解決が出來ます。是迄のことは仕方はありませんが、すくなくとも將來が安全です。いゝですか奥樣、今の下宿はお宅とは直ぐ近くで、眼と鼻の間にあるでせう。近いもんだから頻々參る、そこで女中達は惡口を言ふことになるです。處が今度ずつと根岸の奥へ離れて了ふと……。」

「でも電車も人力車も御座いますし、ほんの一と飛びぢや御座いませんか、遠いと申しても……。」

お種は淋びしく微笑した。

柳之助は甚く恐縮の體であつたが、急にお種の言葉を打ち消す樣な、早口で、

「いや參らんです、決して參らんです。」

「では、宅とは絶交同樣になさるお心算なんですか？」

「絶交同樣……そ、そんなことはないです。葉山君の居る時許り參るのです。それも月に一二度しか參らんです。それなら奥樣は許して下さるでせう……。」

柳之助は恁う言つて、そつと沈んで居るお種の顏を上眼遣ひに見た。

そしてほつと溜息を吐いたが、

「なに好いです。根岸は谷中にも近いし、淋びしくなつたら、お類の墓詣りでもして氣を慰めませう。今の場合それより外には、取るべき手段がないのです。しかし奥樣、僕が是れから類の墓詣をしげ〳〵して、そ

れで氣が慰められるか如何か甚だ疑はしいです。寧ろ氣が一層滅入つて不愉快になつて、類が死んだ當座のやうな氣鬱病が再發するかも知らんです。實のところ、僕は今お類のことを多少忘れかけて、體にも元氣が附いて來てるのですが、是はみな奥樣の賜物です。僕を親切に……眞心から慰めて下さる奥樣の賜物です。僕はもう其の賜物にも接することは出來なくなつて、更にお類のことを思はなければならぬのかと思ふと、實に苦痛です。實に悲しいです。」

（二）

本來沈默家の柳之助が、是程まで胸のうちを披いてしんみり訴へたことは嘗つてなかつた。お種は針で胸を刺さるゝ樣に感じた。唯ならぬ血滴が心臟を攪亂した。更に腕を拱いて首をすつと俛れて、垢で光る衣服の襟に獨身の寂寞を見せて居る、堪へられない彼の風姿を見詰めては、

お種はどんな身に降りかゝる危難を排ひ退けても、此の哀れな人を慰めてやらなければ濟ないと思つた。そして柳之助の現在と將來とに於ける幸福や薄命は、一に自分の心次第でどちらにでも決されるものゝ樣にさへ感じた。けれども、お種はまたそれを思ひ通り實行されぬ自分の境遇を考へて、情なくも口惜しくも感じるのであつた。

「ほんとに鶯見さんにはお氣の毒で……。」

お種の聲は細く哀れに聞えた。

柳之助はキッと姿をあらためて、

「そんなことはないです。僕の方でこそ却つてお氣の毒です。もと〳〵僕の奥さんに對する要求は無理ですからな……餘りに無遠慮ですからな……貴婦には葉山君と云ふ主人がある、そのお世話一つでも却々普通大抵ではないです。それを又僕の世話までは、實際無理です。無理だと知りつゝお願ひする僕の胸中を……奥樣、お察し下さるでせ

う。」

柳之助は眼を連瞎いた。

お種は到頭泣かされて了つた。

それから二日目の夜、葉山が今飯が濟んだ許の處へ柳之助が訪ねて來た。彼は一言二言挨拶がすむと、突然、

「僕は轉宿する！」

と藪から棒に葉山に言つた。

葉山も餘り突飛なので、一寸眼を瞬つたが、すぐに例の晒脱な口調で、

「轉宿と云ふと、つまり宿を引き越して行くことだらう。」とにや〳〵笑つた。

「さうさ。」

柳之助は至極眞面目に應へた。

「そこで相談があるか……。」

「いや僕ひとりで今日極めて來たよ。」

「そいつは怪しからん。平素なら河童の屁の樣な事件にも、此方の相談が必要であつたものを、苟くも驚見柳之助の生命財產を保護しやうと云ふ館の變更を、單獨できめたなぞは、近頃異例の事實だね。」

葉山は村田張の太い銀煙管で、刻みをバクリ〳〵喫つたが、急にトンと長火鉢の縁にはたいて、

「で、所は……　又葉山家の二階へ逆戻でもあるまい。」

「莫迦な！」

柳之助は苦笑したが、

「上根岸さ。上根岸十三番地で、室田と云ふ煙草屋の裏二階だよ。六疊だが却々閑靜でね、尤も日當はすこし好くないが……兎に角氣に合つたから、今日手金を置いて來たが、僕は明日越したいと思ふ。しかし君に相談しないで、僕の獨斷で極めたのは惡るかつたね。許して呉れ給へ。

ね、君。僕は實際惡るかつたね。」

「此方が家賃を出すんぢやないから、そんなに張子の虎の樣にぴよこ〳〵頭を下げるにも當らんさ。處で上根岸と云ふと谷中の類さんの墓に近い筈だね。」

葉山は一寸言葉を切つて、心有り氣に柳之助の顏をじつと見詰めた。

「近いと惡いかね。」

「はい。惡いですな。大に惡いですな……何故と言つて好く考へて見給へ。近頃漸く諦めが附きかゝつて、今一と息と云ふ場合だのに、今又類さんの傍に引き越して行くのだもの、君はきつと再びお百度を踏むに違ひない。そして例のくよ〳〵思つちや泣いて暮すだらう。實際そんなことでもあつた日にや、此方がつまらないからね。」

「大丈夫だよ。それなら大丈夫だよ。僕は行やせんから……行つても以前の樣に思やせんから……。」

柳之助は急ぐ樣に言つた。

「當になるもんか。君のことだもの……。」

葉山は彈く樣に言つた。そして湯呑の上から然も困つて居るらしい柳之助の風情を見て居たが、今度は慰める樣な口調で、

「そんなに困らなくつても好いぢやないか。手金まで打つて來たなら、まあ越して見るもよからうが、君實際お百度は禁物だぜ。恁う言つちや君の耳に情なく聞えるだらうが、正直のところ、今の下宿に飾つてある類さんの油繪さへ撤回して貰ひたい位、僕等は君の身を思つて居るんだもの、況して墓場のそばへ移轉して行かれるなんざあ、全〳〵の大問題だね。」

「そりや解つとるさ。だから僕は何時も君の厚意を感謝しとるぢやないか……。」

「誰が感謝して居ないと言つたよ……。」

葉山は叱つた癖に、小鼻の邊に笑ひの波を寄せたが、直に眞面目になつて、

「で、今迄聞くのを忘れて居たが、一體根岸へ越して行かなくちやならないと云ふ理由は何だい。理由はよ……。」

「理由……。」

柳之助は葉山の詰問に甚く困つたのであつた。彼は初めから其の理由を明々地に葉山に告げ樣とも思はなかつたし、又さう云ふ時に代用させべき理由を拵つて置くだけの豫備智識も有たなかつた。そこへ其の理由はと葉山に詰問されて見れば、柳之助たるもの如何こたへて好いのか、殆んど當惑して了つたのである。

お種さんと自分との間に於いて、女中達に噂をされる樣な、そんな惡い行爲のないことは、誰よりも葉山が一番よく知つて居る。今先夜お種さんと相談した事實を、有の儘に葉山の前に打ち明けた處が、葉山は決して自分やお種さんを何う彼う言つて疑ふ人間ぢやない。きつと鼻の端で笑つて了ふに違ひないが、然うされる程自分には言ひ惡い。氣の毒で迚も言ひ樣がない。初め此家を出る時分も、そんなことが本であつた。それを一ヶ月と經ぬうちに又噂をされるから轉宿する――如何考へても自分には言ひ惡い。殊に今迄の葉山の口振では、お種さんは先夜のことを葉山に秘密にしてあるらしい。兎に角言はずに置う。葉山に嘘を吐くのは苦しいが、言つて氣の毒な思ひをさせるのも亦心苦しい――柳之助は咄嗟の間に恁う考へた末、

「理由と言つて、何も別段の事はないが、唯だ閑靜なところで、悠り調物をしたかつたからさ。」

とお茶を濁したのであつた。

今迄葉山の後に坐つて、春服らしいお召の衣服を縫つて居たお種は、急に安心したらしい顏をしてそつと柳之助を見た。

葉山は噴出しさうな顔付で、

「そんなことを今迄考へて言ふ奴があるかい。なんと云つても驚見一流の答辯だね。閑靜な所で調物がしたい位の理由條件なら、何も上根岸を撰定する必要はなからう。大久保でも向島でも、他に幾何もあるぢやないか、なんなら雪院の中でも……。」

「でも僕は根岸が好きだから……。」

「畜生奴、矢張り四角い冷いものが戀しいと見えるな。了ひに白い衣服を着た裾のない先生が、枕元にふうわりと浮んで來て（貴郎ヤあ……と有仰るやつさ。其んな時分に、葉山助けて呉れなんかは眞平だぜ。それでも宜しいか」

柳之助は默つて葉山の顔を見た。

恁んな對話をした末に、兎に角柳之助は葉山の家を辭したが、明る日のお晝すこし前、彼は第二の疑の門から、上根岸の煙草屋の二階に引き移つたのである。

（三）

年が改つた。今日は正月元日である。

葉山は朝早くから廻禮の爲に留守だが、家を出がけに、お種に對つて、

「元日が來ても、驚見は行く處もなくつて、嘸ぞ淋しがつてるだらう。暮から一向顔を見せないが、どんな鹽梅だかお前今日お晝過に行つて、先生の樣子を見て來るがいゝ。其の序に、餅と重詰物でも持つてつてやれ……。」

恁んなことを言つた。

お種は今所天の吩咐通り物を調へて、乘附けの人車に乘つたのである。平素なら銘仙かなんぞに縞博多と黑繻子の腹合帶でも締めて、極く質素な裝で居るものを、今日は流石にお正月だと云ふので、鼠の格子縞の澁

いお召の重に、濃茶の裾廻しを見せ、上には紺地の縮緬に消繡の紋のついた羽織を着て、猶其の上に當時流行の無地お召の半コートを被ふて居た。生地の白い愛嬌の有る顔に薄化粧を施して、それが綠色の歌舞伎型の髷に映つて一層美しく見えるのであつた。

お種の車は、好く晴れた初春の日影の流れた路をうねり〳〵通つて、今しも上野公園下に差し蒐つた。彿曉がたに珍らしく降つた雪の名殘が、竹の岱や新坂公園あたりの樹立の頭に見えて、軟かい風が吹く度毎、白銀の珠がバラ〳〵と土手の芝草の上に散り落ちた。

車は軈て坂本警察署の前をすぎて、突き當りから三四町程行くと、笹の雪の方に近いところで、室田と云ふ新建の家の煙草屋があつたが、この前でひたと轅棒が止つた。

お種は車から下りて、かねてから馴染になつて居る女房さんに來意を告げると、

「あの驚見さんは生憎お留守で御座いますよ。何でも谷中へ行くと仰有つてねえ、只今出て入らした許のところなんですけれど、三十分もたてば歸つて來るから、若し誰方か見えたら、二階でお待たせして置く樣にと有仰いましたよ。なんならお上りなすつては……。」

女房さんは恁う言つて、愛嬌笑をしながらお種の美しい服裝をじろりじろり見て居る。

お種は女房さんに言傳して、直ぐに歸らうかと思つたが、わざ〳〵根岸界隈まで出かけて來て、逢はずに歸るのも殘り惜しい樣でもあるし、それに如何な風か樣子を見屆けて來いとの所天の命令もあること故、一時間かそこいらなら上つて待つて居てもいゝと心を決めたのである。

「ではお邪魔をいたしませう……。」

お種は車夫から風呂敷包を受け取り、女房さんの案内で二階へ上つて行つた。

二階は南向の六畳ではあるが、縁側の前に隣の土藏の頭が突き出て居るので、本來なら上野の森を一眼に見渡さるべき方位であるが、その景色もまるで見えなかつた。したがつて日當も惡く、何だか薄暗い陰氣な、如何にも柳之助の心持を代表させて居る樣なジメ〳〵した座敷であつた。

床の間の横には、向ひ合せに、金文字入の洋書が一ぱい入つた書棚と、鏡物や植物の標本の雜多々々入つた箱とが据ゑてあつて、眞中の壁には幅物の代に、例の竪三尺に横二尺のお類の肖像畫が懸つて居た。床の間をすこし離れた處に、草色のテーブル懸をかけた一脚の机を据ゑ、机の上にはインクスタンドや、ノートブックや、ペンや、石工細工の鬻體や、其の外何だかんだを秩序もなく置き亂して、灰色の光線に埃の白さも見えるのであつた。亡くなつたお類と結婚したとき、紀念の爲に買ひ求めた、小さい總桐の長火鉢の猫板の上には、鉢植の水仙が黃金色の花を二つ附けて、然も哀れ氣に主人の留守を守つて居た。

お種は家を出る時分から、絶えず柳之助の身が氣になつて、長閑に浮き立つ世間の有樣も、一向其の身に陽氣を感はせなかつた。なんだか恁う暗い穴倉の中に住んで居る人を訪ねて行くやうで、逢はぬ先きから心が滅入りさうで來たのである。

そこへ相も變らぬ陰氣な淋しい座敷を見せられたので、彼の胸は一層暗い色で彩られた。お種はお類在世の當時のことや、柳之助が自分の家に寄宿して居た當時のことや、それからそれと回想の絲を辿つて、しんみりした哀さに誘き出されやうとした時、長火鉢の横に坐つて、お種に茶菓を侑めた女房さんは、

「お暖で好い元日で御座いますねえ。」

と思ひ出した樣にお種に言つた。

お種は夢から醒めた人の樣に、急には女房さんに返言も出來なかつたが、暫くして、

「然うですねえ。外を歩くとボカボカして、まるでもう三月時分の氣候ですよ。」

恁う言つて一口茶を飲んだ。

「えゝ、眞度で御座いますねえ。」

女房さんは頤で頷いたが、多辯の女にはよく有る薄い唇に波を打たせて、更に何か話の端緒でも引つ張り出さうとして居るらしい風情であつた。

お種は、柳之助が歸つて來る時分迄は、きつと此の女房さんが話し込んで居るものと思つた。どうせ然うなら面白くもない世間話を聞かされるより、此方から柳之助の其の後の樣子でもたづねた方が增しだ――お種は恁う考へて、

「鷲見さんは、近頃どんな鹽梅なんですか？」

と女房さんに訊いた。

女房さんは待つて居ましたと言はぬ許りに、一と膝進めて、

「此の頃は始終谷中へお通ひで御座いますよ。今日もきつとお墓詣りに違ひありませんが、貴婦、いくらお亡くなりなすつた奥樣が戀しいと申しても、元日のお墓詣は何だか變ぢや御座いませんか。」

と一寸眉を顰めた。

「さうですねえ。……そんなに繁々入らつしやるんですか？」

お種も不安さうに顏を曇らした。

「えゝ。一日のうちに一遍は、降つても照つても入らしやるんで御座いますよ。でもお墓詣の時分はそれ程でもない樣ですけれど、家に入らつしやると、始終手札形のお寫眞を眺めちや、何だか恁う悲しさうに溜息を吐いて入らつしやるんで御座いますよ。此の間もねえ。朝新聞をもつて上つて參りますと、お床の中で、しきりと見て入らつしやるので、私もうつかり誰方のお寫眞ですかと、ちよつと覗きますと、「見ちやいかん、

見ちやいかん。」と有仰つて、慌てゝ蒲團の中へお隠しなさいますんでせう。私は面白半分に、そんなことを有仰らずに、後生ですから見せて頂きたいとしつこく申しますと、是は亡くなつた妻の寫眞で何も不思議はない、床の間の油繪と同じだと有仰つて、到頭見せて下さいませんでしたけれど、それなら平素からお話しも承つて居りますし、何もお隠しなさる理由はないと思ひますがねえ。何でも髷に結つた女の方が坊ちやんを抱いて入らつしやるお寫眞のやうで御座いましたよ。……あの鷲見さんには、お坊つちやんがおありで御座いましたか……。」

女房さんは長々と辯じてお種の顔を見た。

お種はハッと思つた。其の寫眞は保を連れた自分の立姿に相違ないと思つた。以前は葉山も承知・又自分も承知で懸けさせた胡摩竹の井字の寫眞掛が、どうしたのか此の頃とりさげられたと思つて居ると、それが圖らず表向きでなく秘密で眺めらる爲めであらうとは、お種は女房さんの話で初めて知つたのであつた。

床の中で自分の寫眞を眺めて、柳之助は始終悲しさうに溜息を吐く、女房さんに問はれて亡妻の寫眞だと嘘を吐く――お種は恁うした柳之助の行動や言葉を、仔細に咀嚼いて考へると、何だか心苦しくもあり、心嬉しくもあり、また哀れでも氣の毒でもあつた。更に、女房さんが、其の寫眞の主は自分ではないかと疑つて、それで今ヤマをかけて見たのではないだらうかと考へつくと、どうも自分を眤つと見詰めて居る女房さんの眼の色が變だとも思へた。お種は急に恐ろしくも極り惡くもなつて、覺えず胸を動搖せたが、顔へ現はしてはいよ／＼疑はれる基と、故意と落ち附き拂つた口調で、

鷲見さんには、お子さんが一人おありでしたけれど、奥樣がお亡くなりなすつて間もなく、腸窒扶斯でこれも亡くなられたのですよ。」

と、心にもない嘘を吐いて、辛つと其の場を濁したのであつた。

「まあ、お可愛さうに、お何歳で……」

「さう、たしかお四歳であつたと思つて居りますけれど……男のお子さんでねえ。」

「えゝ、眞度にねえ、お可愛ざかりのお子さんを……鷲見さんも餘程不幸なお方で入らつしやいますねえ。」

お種は女房さんのしんみりした言葉を聞いて、是れなら豈夫ヤマをかけたのでもあるまいと思つた。そして惡く氣を廻して疑つた自分を恥かしくも思ふのであつた。

「それでは彼の此の間の朝のお寫眞も、きつと奥樣ので御座いますんでせうが、何もあはてゝお隱しなさらずともねえ、眞度に妙なお方で御座いますねえ。」

女房さんは小間してから恁う言つた。

「鷲見さんは、仲々變人で入らつしやるから……。」

お種は申譯程に言つて口を噤んだ。

それから女房さんは、柳之助が初めて下宿した當座は、食事の折の外物を言つた例しのなかつたことや、段々慣れてからは、床の間の油繪の所由因緣なども聞かされたことや、近頃件の寫眞を見る樣になつてからは、人間は又がらりと變つて、食事は進まず、二六時中たゝ蒼い顏をして溜息を吐き、何のことはない昔の戀病にでも惱んで居る人の樣に窶れ果てたことなどを、諄々と話し込んだ。

お種は女房さんの熱心になつて言ふ話を、默つて頷いて許り聞いて居るに忍びなかつた。そこで致方がなく、是もお類の亡くなつた當座の悲慘な話や、自分のうちに寄宿時代の有樣などを可也詳しく物語つた。

二人の話は今度は世間噺に移つた。それがものゝ十分も經たぬうちに、何時か又柳之助の身の上に戻つて來た。其の折はお種は何も言はなかつたが、女房さんは、

「眞度に、驚見さんの樣な情の深いお方は、當世にはお珍らしい。あゝ云ふお方を檀那にもつた奥樣は、全くお多倖で御座いますねえ。私なら、たとひ死んだつてすこしも殘り惜しいとは思ひませんねえ……。」

と、口元に淋びしい微笑を泛べて、二度も三度も繰り返して言つた。

此の時、階子段を人の登つて來る氣配がした。それは谷中から歸つた柳之助であつた。

（四）

女房さんは柳之助の姿を見るが否や、

「おや、お歸りなさいまし。貴郎がお出懸になると直ぐ、奥樣が入らつしやいましてねえ。今まで私が代理を勤めて居りましたのですよ。さあ今度は下へ參りませう……。」

と、急に起ち上つて、一寸お種に挨拶したまゝ二階を下りて行つた。

「どうも失禮でした。」

柳之助は、女房さんに言つたのか、それともお種に言つたのか、頗る曖昧な挨拶をしたが、軈て古ぼけた外套を脱いで、座敷の隅に放りつける樣にバサリと置いた。彼は又鼠の中折帽をとつて、其の皺苦茶になつて居る外套の上に置いたが、いきなりお種と差し向に坐つて、

「新年はお目出度う……。」

と頭を輕く下げた。

それが餘り唐突であつたので、平素恁う云ふことには慣されて居るお種も、一時は面喰つたのであつた。

が、直ぐに氣を取りなほして、

「明けましてお目出度う御座います。昨年中は何彼とお世話になりまして……。」

お種が未だ言葉を續けやうとしたのを、柳之助は中途で奪つて、

「それは……それは僕の方で申す言葉です。」

とすこし吃つた口調で言つた。そして美しく着飾つたお種の姿を、ひどく珍らしさうにじろ〳〵見初めたのである。彼は何時かお種が本郷から歸つた時、奥樣は藝者のやうに粹ですと賞めたことがあつたが、今もお種の此の美裝に對して、何とか賞めなければならぬと云ふ樣な態度を示現して居るらしかつた。けれども彼は何とも言はなかつた。

お種は此の時、柳之助の姿を最も明瞭に見ることが出來たが、何だか胸が一ぱいになつた樣な氣持がした。お正月だと云ふのに、平素着の銘仙の綿入に手垢で汚れた白縮緬の兵庫帶を締めて、袖口の糸のよれた紬の紋附を羽織つて居た。黑いすこし縮れた頭髪はぼう〳〵と延びて、眼は妙に底濁のした色に光つて、蒼白く痩せ憔けた顏には、燒山の蕨の樣に太い髯が生へて見えた。一と月程逢はずに居たけれど、此の變り樣は何事だらう。お類さんが亡くなつた當時の驚見さんを、再び見るやうな氣がすると思ふと、お種は實に堪へられない哀れさと氣の毒さとを催したのである。そして此んなに窶れ果てたのも、先程女房さんが話した自分の寫眞が原因ではないかと、ふと感附くと、お種は悲しいうちにも、ゾッと恐怖の念に打たるゝのであつた。

「今日も谷中へ行つて來たんです。」

柳之助は程たつてから、恁う思ひ出した樣にお種に言つた。

「此の頃は、度々谷中の方へ入らつしやるさうで御座いますねえ。」

お種の聲はすこし顫ひを帶んで居た。

「誰がそんなことを言ひました。下の女房さんでせう。下の女房さんが言つたでせう。」

柳之助は早口に問ひ返した。そしてお種がさうだともさうでないとも、未だ何とも返言をせぬうちに、沈痛な口調で、

「實は、葉山君や貴婦に對して、あれ程堅い宣言をして來たのですが、

此所へ越してみると却々然うはいかんです。行きどころはなし、話合手はなし、然ればと云つて讀書もさうはして居られず、遂ひ淋しいもんだから、ふいと出かけて了ふです。今日も元日だと云ふのに、お墓詣も變だとは、自分でも思つたです。けれども世間はあの通り陽氣でせう。其の陽氣な有樣を見たり聞いたりしてるだけ、此の部屋が陰氣で不愉快で堪らんでせう。そこで出懸けて了つたです。奥樣は同情して下さるでせうが、葉山君が聞いたら、きつと僕を怒るでせう。しかし怒られても此の場合致方がないですものな……。」

「さう云ことなら、強ひてお墓詣などなさらずに、宅へ入らしつても好う御座いますのに……。」

えゝ。お宅へ上りたいのは山々ですが、年禮廻の爲に葉山君は留守だらうし、それに貴婦はお客やなんかでお忙しいだらうし、且つ例の一件もあるですから、實は我慢に我慢をして上らなかつたのです。」

「でも、平素と違つてお正月ですもの、誰も何とも思ひは致しません。」

お種は恁う言つて、煙草に火をつけて居る柳之助の頭の邊をじつと見たが、聲を潜めて、

「葉山には彼のことを一切秘密にして置いたもんですから、貴郎が急に此方にお越しになつたのも、實は不思議に思つて居るらしい樣子で御座いますよ。その上、毎日入らした方が、月に一度か二度、それも近頃は丸一と月も入らつしやらないでせう。葉山は絶ずどうしたのだらう〳〵と、大變心配して居りますけれど、御存じの通の忙しい體ですから、伺ふことも出來ずに獨で氣をもんで居るので御座います。ですから、月に三四度は入らして下さいましな。ねえ。それ位なら入らしつても、急にお止めになるよりは、女中達の手前も好う御座いますから……。」

「しかし、僕の性質として、月に三四度も上ることゝなると、遂ひそれが癖になつて、また頻げ〳〵上ることになるのですから、僕はそれを…

それを……恐れとるのです。」

「ですから、そこを御辛棒なさらなければ……。」

「成程。それもさうですな……。」

柳之助は頷きながら言つた。そして小間じつと考へ込んで居たが、

「葉山君はそれ程心配しとるですか？」

「えゝ。大層心配して居りますんですよ。」

お種は恁う言つて、座蒲團の傍に置いた、二人が心盡しの重詰と餅を柳之助の前に差し出して、

「お淋しいだらうと思つて、此んなつまらないものですけれど持つて參りました。何卒召し食つて下さいまし。」

柳之助は、二段も重つて居る綺麗な卷繪の重詰と、南部名產の籐籠に一ぱい滿つた切餅とを眺めて、思はず顏に喜びの情を輝かしたが、

「是はどうも御親切に有難う……始終奥樣や葉山君のお世話になる計りで、僕の方からは何も御返禮をしたことはないですが、實際すまんです。葉山君は酒の外は何をやつても喜びはせんが、奥樣は着物は好いでせう。ね、着物なら……。」

「私は何も頂きたいものは御座いませんから、眞實に其樣ことをなすつてはいけませんよ。」

お種は眞から迷惑さうに言つた。

「却つて御迷惑ですかな。さう〳〵何時かも貴婦に指環を買つて進げやうと言つて、非常に僕が貴婦に叱られたことがあつたですな。ぢや廢めませう。」

話はしばらく途切れた。

何處からともなく、長閑な鶯の音が聞えて來た。此の鶯の音を聞いた時柳之助は突然、

「ひとつ飲みませう。頂いた肴でひとつ葡萄酒を飲みませう。お正月だ

から奥様もつきあつて下さい。」

と、頗る元氣の籠つた聲で言つたが、すぐに標本箱の中から、未だ栓を拔いた許の葡萄酒の中瓶と、外に小さい硝子製のカップを二個取り出して、其の一個をお種の前に、他の一個を自分の膝の前に置いた。そして酌もしないで、何だかもじ〳〵して居るので、お種は早速氣を利かして、

「失禮ですが、私がお酌を致しませう。」

と、火鉢の横にあつた件の瓶を手に取つたのである。

「さうですか。どうも恐縮です。何だか手酌は美味くないですからな……。」

ちよつと口元に淋びしい微笑を浮べた柳之助は、何の遠慮もなくずつとカップを差し出して滿々とお種に酌をして貰ひ、それを一口飲んで、

「あゝ恁うして、奥様と一所に酒を飲むと、僕は非常に愉快を感じるです。しかし今に歸つて了はれるのだと思ふと、なんだかまた悲しくなるですな……。」

と恁う哀れつぽく言つたが、今度は自分で瓶をとつて、お種のカップに是も滿々と酌をした。

お種は其のカップに、唇を押し附くる樣にして淺く一口飲んだが、柳之助の方を見て居る彼の眼には、絶えず不安と恐怖の色が滿たされて居た。

「しかし、幾ら悲しいからと云つて、貴婦は僕の親友の細君である以上さう僕の勝手にお引き留めすることも出來ないですから……。」

柳之助は然も絶望した樣に言つたが、更に言葉を更めて、

「僕は未だ忘れませんが、何時か雨のざあ〳〵降る淋びしい夜でした。お宅の二階で、三時頃まで貴婦にお酌をして貰つたことがあつたですな……葡萄酒を……。」

此の辺りの言葉のはしの方は一寸気をはりする程よい。

「さう。何でもそんなことが御座いましたねえ……。」

お種は恁う氣のない返言をしたが、何だか聲の調子は身に浸みて居るやうでもあつた。

柳之助はいよ〳〵熱心になつて、

「彼の時は、唯だ味も解らずに無茶苦茶に飲んで……寧ろ神經的に飲んだですな。そして醉つて寢るのが樂なのでしたが、今日の酒の味はまるで違ふです。非常に違ふです。」

「どんな風に違ふので御座います？」

「どんな風つて、一寸言ひ憎いですな……さう、唯だ何となく美味いです。」

柳之助はカップを呷いと一息に干して、それを進げるとも何とも言はずに、默つてお種に差した。

私ならまだ此んなに御座いますから……貴郎お重ねなさいまし。」

お種は柳之助の差したカップを押し戻す樣な手附をしたが、其の手で直ぐに瓶をとつて、

「さあ、お酌を致しませう。」

「さうですか。貴婦はすこしも飲らんやうですな、ぢや後に進げませう。」

柳之助は、再びお種から酌いで貰つた酒を三分の一程飲んで、それを大事さうに猫板の上に置いた。

（五）

「お肴は如何で御座います。」

お種は重詰の蓋をとつて柳之助に侑めた。

上の一段には櫛形の蒲鉾、栗の金團、二色玉子、鮪の照燒などが滿つて、下の一段には鷄と筍と里芋の甘煮が一ぱい入つて居た。

「實に見事な料理ですな……。」

と眞から感心した樣に言つた。

「お正月のお料理は、何時も同じことで、大してお美味くも御座いませんですよ。」

とお種は言つた。

柳之助は二色玉子を黑文字でさして、それをむしや〳〵食べたが、

「是は僕の大好物です。實に美味いですからな。」

「お宜しかつたら、どうぞ澤山召し上つて下さいまし……。」

恁うして二人は小間杯を重ね。

お種は葉山に慣らされて、すこしは飲ける口である。そこで遂ひ物の三四杯は飲んだので、薄化粧を施した白い顏がほんのり紅味を帶びて、一層美しさが輝く樣に見えた。

是も可也酔の發して來た柳之助は、催淚んだ眼をとろりとさせ乍ら、今更にお種の姿に見惚れて居たが、

「葉山君は幾何飲んでも平氣だが、貴婦はぢきに顏に現はれて來ますな。」

と言つた。

「ですから盗み酒は致しません。」

お種は輕く笑つた。そして兩の掌で溫つた顏をそつと撫でたが、

「貴郎も好いお色で御座いますよ。平素もそれ位のお顏色ですと、如何にも壯康〳〵しく見えるのですけれど、何しろ大相お窶れなすつて入らつしやるから……。」

「僕は其樣にやつれましたか？」

柳之助も兩掌で顏を撫てホッと吐息した。

「えゝ。眞度に此の頃は急にお悴れなすつた樣で御座いますよ。餘りお類さんの所へ逢ひに入らつしやるからでせう。」

「いや、其樣ことはないです。斷じてないです。若し僕が悴れたとすれ

ば、それは外に原因があるでせうが……。」

柳之助は一寸言葉を切つて、

「谷中へ行つても、此の頃は餘り悲しいとも思はんです。其の癖また氣も晴れんです。言はゞ習慣の墮性で、たゞ漫然としてお墓詣をするです　な。どうして恁う心に變化を來したのか、實は自分で自分を疑つとる位です。」

「大相不實で入らつしやいますねえ。」

「不實ではないですが、段々諦めが附いたと云ふ表徵でせう。」

「その諦めと申すのが、もう不實では御座いませんか？」

柳之助は、苦笑を漏しながらお種の顏を見た。お種は其の視線を避くる樣にして、

「不實と云へば、貴婦も私に不實をなすつて入らつしやいますねえ……。」

「不實？　僕がですか……貴婦に……。」

柳之助は自分の耳を疑ふ程、愕然として驚いたのであつた。

「あれ、そんなに大きな聲をお立てなすつては……。」

柳之助はお種の言葉を耳にも入れないで、

「實に驚くです！　僕が貴婦に不實な行をして居るなどは、全く夢にも思はんことですものな、僕は何事に限らず、貴婦を誠意を以て迎へてこそ居るが、決して不實をした覺えはないです。斷じてないです。神冥に誓つてないです。」

「處がありますから不思議ぢや御座いませんか。」

「あつたら聞きませう。いくらでも聞きませう。さあ言つて下さい。」

柳之助は顏色を變へ、眼を睜つて一と膝乘り出して、お種の方へ迫つて來た。

お種は、柳之助に然う眞劍になられて、一時は氣の毒にもなつたが、

今更取消しも出來ないので、

「私の寫眞をどうなさいました？」

「やあ、彼れですか……不實と可ふのは彼の寫眞のことですか……。」

柳之助は大に安心した樣に言つた。

「最うお飽きになつて、屑屋へおやりになりましたんでせう。」

「屑屋……屑屋とはひどいです。實にひどいです。誰が貴婦の寫眞を屑屋などにやるもんですか……。」

柳之助は又眼を睜つて聲を大きくした。

「ではどうなさいました？」

お種は突つ込む樣な調子で言つたが、

「此の頃は一向飾つても下さらず、どうなすつたのかと、內々心配して居りましたので御座いますよ。」

柳之助は、今度は驚くよりも寧ろ慌てたと云ふ工合で、口を吃らせな

がら、

「彼れは……彼れはちやんと匣の中に……匣の中に大切に保存して置いたです。」

「なぜ飾つてお置きになりませんですか？」

「それはですな、實は先頃ふと氣が附いたです。貴婦は葉山君の妻君でせう、好いですか……其の妻君の寫眞を、如何に大切だと云つて、公然と飾つて朝夕眺めて居るとは、葉山君に對しても餘り無遠慮すぎると思ひ附いたです、葉山君は僕のすべてを信じて居るから、よしんば公然と飾つて置いても、決して僕に惡感情を抱く樣なことはありますまい。しかしですな。恁う云ふことは他のことゝ違つて、遠慮するのが本當ですからな……單り葉山君許でなく、他人に見られても、疑ひを招く樣な動機にならんとも限らぬ譯ではあるし、旁々惡いと思つて、實は遠慮して、匣の中にしまつて置く樣にしたのです。」

柳之助は考へ〳〵、隨分幼稚な吩咐を長々したのであつた。

「たしかに匣の中に御座いますか？」。

「ありますとも。嘘ぢやないです。」

「でほちよつと見せて頂きたいもんで御座いますねえ……。」

お種は恁う追求して訊くと、柳之助は非常くどぎまぎして、

「あるです。あるです。慥に保存してあるですから、其樣に心配なさらなくとも好いです。」

お種は柳之助の言ふことは頭から信じて居らなかつた。先程の女房さんの話や、自分に對する柳之助の今迄の素振などを考へても、お種は自分の寫眞が匣の中に保存されてあると云ふことには、如何しても信を措くことは出來なかつた。公然飾つて見て居やうが、秘密で見て居らうと、自分の寫眞を愛すると云ふ柳之助の情緒には變りはないが、秘密で見て居ながら、匣にあると言つて飽くまで實を吐かぬ、それが平素氣心を知つた柳之助であるだけそれだけ、お種は一層苦らかつたのである。

「驚見さん。そんなにおかくしなすつても、私はちやんと存じて居りますよ。貴郎は秘密で、終始その寫眞を見て入らつしやるぢや御座いませんか……。」

お種は醉つた勢で恁う突つ込んだ。

「秘密で……そんなことは嘘です。全く嘘です。全く嘘です。」

柳之助は紅い顏を猶紅くした。そして頗る早口でお種の言葉を否定したが、

「それも下の女房さんの話しでせう。」

と、今度は、然う露はれて了つては外に仕方がないと云ふ樣な風をした。

お種は聲を潜めて、女房さんの話の一伍一什を可也詳しく柳之助に言つて聞かせた末、

「なぜそんなに、秘密でなんか御覽なさるのですか。幸ひお女房さんの眼には、一寸しか止らなかつたから好いやうなものゝ、若し正面に見られでもしたら、それこそ變に思ふのは知れ切つた話しで御座いませう。」

お種は恁う叱つては見たが、首を俛れて、腕を拱いて、深い溜息を吐いて居る柳之助の有樣を眺めると、又氣の毒にもなつて、

「もう過ぎたことなら、致方がありませんが、是れから御覽なすつては嫌やで御座いますよ。」

と、言葉を優しくして言つた。けれども柳之助は何とも應へずに、唯だ溜息を哮つと漏すのみであつた。

「それでねえ。お女房さんは頻りと、寫眞に撮つて居る子供のことを訊くもんですから、私は、それは四歳になる鷲見さんのお子息で、奥樣がお亡くなりなすつて間もなく、腸をお惡くして矢張り亡くなられたと、然う一時逭れを言つて置きましたから、何卒其のお心算で……好う御座いますか……。」

「はあ……。」

と柳之助は初めて口を開いたが、極く沈痛な口調で、

「奥樣、實に貴婦に對して面目もないですな。僕は今その寫眞のことに附いて、僞りのない事實をお話しするですから、何卒お怒りなさらずに聞いて下さい。」

柳之助は、是を冒頭にして次ぎの樣なことを物語つた。

柳之助は根岸へ轉宿以來、お種の寫眞を唯だ飾つて眺むる許では、何だか物足りない樣な氣がするのであつた。

彼は到頭寫眞掛からそれを取り外して自分の膚に附けた。そして机に對つて讀書する時、寢轉んで思索に耽ける時、他所を散歩する時、乃至臥床に就いた時、谷中のお類の墓詣に行つて、冷い石に腰をかけ、樹の間を洩るゝ日光を全身に浴びせながら、お類の生前を追懷する時ですら、

此のお種の寫眞を見詰めずにはおかなかつた。そして彼は其の寫眞の表から發する何物かに對して、種々な空想を逞うしなければ氣が濟まなかつた。

彼は何時でもお種の寫眞を眺めたとき、其の心に此の世では求むることの出來ない最大の愉快を感じるのであつた。同時に又激烈な、尖鋭な、恰も心臓を針で刺さるゝ樣な悲哀に襲はれるのであつた。それが一週二週と日數が經つに連れて、愉快の情は段々消磨されて唯だ悲哀の情許り殘る樣になつた。彼は此の悲哀の情に襲はるゝのを非常に恐れながら、仍且お種の寫眞から遠ざかることは出來なかつた。

柳之助は恁うして物の一と月程は、苦痛と悲哀とで送つたが、遂ひ激しい不眠症に陷つた。彼の眼は晝と夜とを通して眠いと云ふ感じを知らなかつた。そして始終氣が遠く頭が又岑々痛んで、何をするにも臆刼でならなかつた。彼は何うかして悠然眠つて頭を休めたいものだと考へた

末、モルヒネと葡萄酒の力を借りることにしたが、是れとて一夜のうちに僅か三時間位しか効を奏しなかつた。

柳之助の不眠症が日に〳〵嵩じて、近頃は折々幻覺を見ることがある。二三日先の夜も彼が机に倚つてお種の寫眞を熱心に見詰めて居ると、急に寫眞の表に靄でもかゝつた樣になつて、其の中からお種の肖像がふらふらと拔け出て行つた。彼は其の肖像の、閉め切つてある座敷の外へ行かぬと云ふことを明かに認めたが、座敷の何處へ止つたと云ふことは解らなかつた。すると突然、お類の油繪の前に何か人間大の黑い印影が現はれた。彼は近寄つて熟視すると、それは物を言はぬお種であつた。

「まあ、氣味が惡い！」

覺はず頓狂な聲を出して身顫ひしたお種の顏は眞蒼であつた。唇の色も變つて見えた。

「奥樣、僕は幻覺を見る迄に、近頃は貴婦の寫眞に對して切實な感情を

抱くやうになつたです。いゝですか、唯だ寫眞にだけですよ。寫眞なら許して下さるでせう……寫眞なら……。」

柳之助は恁う感情的に言つて、

「其の癖僕は……貴婦の寫眞を見ると、非常に悲しくなるです。そして其の悲しみが激して來ると、自分でも氣が狂ひ……氣が狂ひでもすまいかと思ふこともあるです。だから、寧そ思ひ切つて、此の寫眞を返ししやうかと考べることもあるですが、何だかさうなると自分の生命でも奪はれて了ふ樣な感じがして、又一層悲しくなるです……。」

柳之助は涙を二三滴膝に落した。

お種は仍且眞蒼な顏をして、キッと下唇を前齒で嚙んだまゝ默つて居た。

お種が柳之助の下宿を辭して、待たして置いた車に乘つたのは、夕方には間もない四時時分であつた。

外は年始廻の客の往來も大分減つて、路の兩側には、紅い夕日の影を浴びながら、美しい衣服を着た若い男女が、俳優の押繪の附いた羽子板で餘念なく燕子をついて居た。

柳之助の最後の言葉を聞いて、明かに自分は柳之助に慕はれて居ると云ふことを意識したお種は、恁う云ふ畫の樣な光景に接しても、すこしも元日らしいとは思はなかつた。家を出る時も絕えず其樣氣がして居たが、歸りにはそれが一層激しかつた。唯だ明るい處で、人が理由もなくうよ〳〵騷いで居るとしか思へなかつた。

人の妻が他の男に慕はれる――所天の親友から想はれる――昔堅氣の親の手鹽で育つたお種は、是れ程恐しいことがまたと有うかと思つた。是程悲しい怨襟いことが世に有うかと思つた。そして車の上で幾度も泣

いては涙を袖で拭つた。涙の出ぬ時は溜息許吐いた。

お種は恁んな恐しい怨襟い想ひを、如何して其の身から排ひ退けやうかと思つた。お種は恁んな恐しい怨襟い思ひを自分にさせる柳之助に如何して諦めを附けさせやうかとも考へた。他人の力や注意位で諦めが附く樣なら、鷲見さんも口へ出しては言ふまい――お種は恁う感じると、寧そ消えて無くなつて了ひたかつた。又身が二個に別けらるゝものならば、其の一個を柳之助に捧げて、一秒時も早く恐怖と悲痛から逭れたいとさへ思つた。

けれどもお種は葉山の妻である。如何することも出來ない身であつた。

お種はふと、昨日の朝、東京朝日に掲載されて居た、或る無口な沈欝な一大學生が、友人の妻に戀したが、想が遂げられなくつて自殺して死んだと云ふ記事を想ひ出した。そして自分と柳之助との事實も、其の記事に對照させてみて覺はずぞつとした。そして其の記事の副主人公たる友人の妻なる人が、大の男を見殺しにして置いて、今どんな心持ちで同じ東京市内に生きて居るだらうと考へたとき、お種の體が一層顫ひ出して、車の上から陷落ちさうになつたのである。

「豈夫鷲見さんに限つて、そんな無分別なこともなさるまい……。」

お種は我に復つたとき恁う思つて、早鐘を打つ樣な心臟の鼓動を鎭めたが、それでも稍もすると、

「鷲見さんだから何とも言へない。」

と云ふ不安の念が頭を擡げて來るのであつた。お種は散々に迷つたり、種々に考へたりして、終ひには自分で自分の身を如何して仕末したら好いか解らなくなつた。で、此の上は今迄のことを何も彼も所天に打ち明けて、そして所天の智慧を借りるより外途はない。幾何きまりが惡いと言つて、此うなつたらもう所夫に秘密にして居られるものでない。又秘密になんぞして置くのは、人の妻としての道でない――お種は恁う心を

決めて了つたのである。

車夫は三十分程を費して辛つと門前に輓棒を下した。

お種は車を下りて玄關に上ると、奥の座敷の方から轉げる樣に保が驅けて來て、

「母ちやん……お土産は……。」

と、突如コートの袖にぶらさがつた。

お種は淋しい笑顔をしながら保を抱き上げて、唇をちよつとその頰に附けたが、直ぐに又下ろして、

「今お土産をあげますよ。坊やは好く大人なしくして、ひとりでお留守番をして居ましたねえ。」と言つた。

其の時勝手の方で何か洗物をして居た二人の女中が、前掛で手をふきながら出て來て、

「奥樣、お歸りなさいまし……。」

と、同音に言つて其の場に畏つた。一人はお花と云つて今年十九になるお太福顔、一人はお時と云つて、お花よりは二つ上の盤若面であつた。

お種はずつと茶の間に入つて、

「あの、檀那は未だお歸りがないかい。」

とお時の顔を見ながら訊いた。

「はい。檀那樣は未だお歸りが御座いませんけれど、芝のお嬢樣が入らつしやいまして御座います。」

「おや左樣。道子さんが來たの。で、もう歸つたのかい。」

「いゝえ。只今便所で御座います。」

お時は恁う言つて、お花と一所に臺所の方へ行つて了つた。

お種は風呂敷包を明けて、途中で買つて來た甲州葡萄の一房を保に與れてから、納戸の方へ行つて、衝立にかけて置いた銘撰の平素着に衣服を着換へた。

間もなく便所の戸がカタンと音がして、手洗鉢に金柄杓の當る音がして、それからスリッパと衣擦の音がして、今度は束髪姿の黒い影法師が、夕日の映して居る障子にうつつた。此の影法師が障子をさあつと啓けて人間になつた時、涼しい聲で、

「從姉さん。お目出度う御座います。」

と莞爾しながら輕くお頭禮をした。

「入らつしやい。」

とお種は長火鉢に炭をつぎながら、

「元日だと云ふのに好く出られたことねえ。今夜は宿つて行つてもいゝでせう。」

「えゝ。其の心算で來たんですけれども……。」

「けれど……もう歸りたくなつたの……。」

言つたお種も言はれた道子も、何の意味もなしに莞爾りした。

道子は今年二十歳になるが、お種の從妹に當るのであつた。細面の色の白い、眼の涼しい、眉の濃い、口元の可愛い容貌で、荒い派出な縞お召の重着に、お納戸縮緬の紋附を着た服裝などは、若いお種を見る樣にお種には好く似て居るのであつた。昨年上野の音樂學校を卒業以來、芝の神明の家で、毎日好なヴイオリン許り彈いて遊んで居る。それが久し振で而も元日に葉山家を訪ねて來たのであつた。

「此の頃は、大分御無沙汰をして居るけれど叔父さんも叔母さんも御壯康ですか。」

お種は道子に葡萄を侑めながら言つた。

「えゝ。相變らずですわ。」

「結構ですねえ。」

「阿母樣は、從姉さんがどうして來ないんだらうつて、始終その事許し言つて居ますわ。お忙しいでせうけど、偶には入らつしやいな。」

「えゝ。私も行かなくつちやならないと、何時も思つて居るけれど、何だかんだと用が多くつてねえ。濟まないけれどつい御無沙汰勝ちになつて了つて……。」

恁んな話を冒頭にして、種々な世間話や、親戚の噂などをして居るうちには日が暮れて了つた。

電氣が燈いて、御馳走の仕度が出來て、是で葉山が歸つて來さへすれば、何時でも夕飯が食べられる時分となつた。

五時が過ぎ、六時が打つても葉山は歸つて來なかつた。

「どうせ遲いだらうから、待たずに初めませう。」

お種の指命で、お時はお膳を隱居所へ持つて行き、お花は種々な料理の並んで居る食卓を座敷の中央に据えた。道子とお種はそれに差し向つた。葉山の座る所には保が紅い頰をして坐つた。

「まあ、小さい阿父樣だこと……。」

と道子は金環の耀く藥指で、ちよつと保の頰を突いて笑つた。

「坊やはお父樣ぢやないの、大くなれば阿父さんになるの……。」

保の眞面目くさつた理窟が可笑しいと云つて、道子は横腹のあたりを叩きながら、更に大に笑つた。お種とても、決して可笑しくないことはなかつたが、胸に一物を抱いて居る今夜であるから、唯だすこし許り微笑を漏らしただけであつた。

それから二人は、肴をつゝきながら、しばらくお屠蘇を飲み合つた。

道子は先程から、お種の顏色が如何も好くないと思つて居た。平素から餘り快活の方ではないけれど、今日は特別沈んで居る樣にも思へた。そして、見る物を見て居る時は、從姉さんは何時も此んな顏をして居るから、必然それの故だらうと獨できめて、別段心配をせずに居たのであつたが、何だかよく見るとそれらしくもない樣なので、遂ひ恁う訊いたのである。

「從姉さん、貴婦どつかお惡くなくつて……。」

「いゝえ、別に何とも……。」

お種はハッと思つたが、力めて平素を粧ふて言つた。

「ではいゝけれど……。」

道子は、お種が是程顏色が惡くつても、別に何ともないと云ふやうでは、矢張り例のであつたと思つて安心した。そしてそれつきり追求しては訊かなかつた。

軈て吸物が出て、お雜煮が出て、道子の大好物と云ふ茶碗蒸が、近所の料理屋から仕出されて來て、今其の暖い息の立つて居る蓋に手が掛らうとした途端、玄關先で、

「お歸り！」

と車夫の呼び聲がした。

「あら、義兄さんのお歸り！」

道子は恁う言つて身を起した。

お種は何だか浮かぬ顏をしたが、それでも體だけは元氣好く起した。

（七）

其の夜、葉山とお種が臥戸へ入つたのは、もう十時うつて間もない時分であつた。

可也に醉つて居る紅い顏をした葉山は、枕頭に電氣を引き寄せ、トロンコの眼を無理に見張つて、今朝の見殘しの新聞を讀んで居た。そして時々怠るさうな欠伸をした。

すヤ〳〵と寢入つて前後も知らぬ保の傍には、寢卷姿になつたお種がちやんと坐つて、屈托顏に頻りと今日の一件を考へて居た。

何も知らぬ葉山は、新聞に注いで居た眼を折々そらして、常例にないお種の物思はし氣な風情を見たが、忽ち性癖の一と酒落言つて見たくな

つたので、

「何だい。お正月早々、五人囃が苦が虫を食つたやうな顔をして……桃の節句は未だで御座い……。」

「……」

お種は莞爾ともせず、矢張りじつと考へ込んで居る。

葉山はぐるりと體を廻はしたが、腹這になつて頤を枕に靠せた。そして新聞を投出した手で煙草盆を引き寄せながら、

「苦が虫で承知が出來ないなら、千振りと行かう。千振りとはどうだい。是れなら形容し得て妙だらう。おい〳〵千振りを飲んだお雛樣……。」

葉山の愚にも附かぬ洒落をば、平素耳の穴にタコの寄るほど聞かされて居るお種は、是を聞いてさへ可笑しくも何ともなかつた。別して今夜は、胸の裡に身の浮沈を支配する程の大問題を控へて、今それを所天に圖らうとする矢先であつたので、お種はいつそ葉山の洒落を、腹立しくも憎らしくも思ふのであつた。

「良人、大變なことが出來て了ひました。」

お種は小間經つてから、聲を顫はせながら言つた。

「ヤア千振が効き過ぎたと見えて。大變だとお出でなすつたね。何が大變だい。褌から虱を拾つたが、何處の交番へ行つたら受け附けやうと云ふ相談でもあるまい。」

「もう大概にお廢しなさいましな、人が眞面目で申して居るのに……：」。お種は怒つとして言つた。

葉山は俶爾身を起して、今度は蒲團の上に胡坐を組いたが、

「はい承りますよ。で、何だい。その大變と云ふのは……。」

と妙に口をすぼめて、眉根に淺い皺を寄せながらお種を眤つと見詰めた。

口をすぼめて眉根に皺を寄せると云ふのは、葉山が眞面目になつた證

憑を現はすのであつた。お種は此の機會を外してはと、

「今日お晝過に、驚見さんへ行つて參りました。」

「呑々。什んな鹽梅だつた。生きてるだらう。」

葉山は眼元で笑つた。

「はい。生きて入らつしやいます。」

お種もちよつと苦が笑ひして、

「その驚見さんについて、眞實に困つたことが出來て了ひました。」

「驚見に口說かれでもしたのかい。」

「あれ、そんなに露出に有仰らなくつても……。」

お種は嫌な顏をしたが、

「兎に角、すつかりお話ししないと釋りませんから、まあ長くとも辛棒して聞いて入らして下さい。」

と、今迄葉山に秘密にして置いた、柳之助の轉宿の一條から、今日根岸の下宿へ行つて、女房さんから聞き取つた寫眞の一件や、此の頃ろ自分の姿を幻覺にまで見るに至つたと云ふ柳之助の狂的狀態や、其の他自分の目擊した一切の事情を詳しく物語つて、お種は恐る〳〵所天の顏色を伺ふのであつた。

葉山は流石に洒落も交へず、神妙にしてお種の訴へを聞いたが、

「あゝ、困つたことになつたな……。」

と、此の時許は眞から溜息を吐いたのである。お種は其の所天の溜息を、胸を貫く彈丸の響の樣に聞いた。そして在るにも在られぬ苦しい心地をしたが、じつと堪へて、

「それで、途々其の事ばかりを考へて來ましたけれど、如何して好いやら、一向私には……あゝ眞度に困つて了ひました。」

お種も溜息を哮ッと吐いた。

葉山も其の溜息には大分感へたと見えて、沈んだやうな調子で、

「是れが尋常人なら何でもないことだけれど、何しろ玉が玉だから困るのさ。」

と腕を組んだが、今度は浮いた様な調子に變つて、

「お前も隨分因果な女さ。初めは蛇か蜴のやうに嫌がられて、さてそれが好きになられると、今度は蟒のやうに執着される……お前が最初蛇蜴で、後には鷲見が蟒さ。面白い對照ぢやないか。處が此の蟒は性の可愛い蟒で、たゞ一寸人間の體に附着いて、すこし許り紅い物を吸つて居ればいゝのだ。決して肉まで食ひ破つて、了ひには生命までも覗ふ惡玉ぢやない。それを嫌やだと言つて捕つて棄てたら、彼は必然餓死するに極つて居る。可愛さうだ。好いから痒いのを辛棒して小間く附けて置くさ。なんなら一と思ひに犧牲になつて了うか……。」

「犧牲と有仰ると……。」

「何さ。鷲見お種となる事さ。」

お種は悚然とした樣な顏をして、又そろ〳〵酒落の出かゝつて來た葉山を見たが、

「普通なら知らないこと、恁う云ふ場合にそんな串談は仰しやらないで下さい。……私に其程の根性骨が御座いましたら、何も恁うやつて貴郎に御相談は致しません。」

と、つんとする。

「御尤も！　またあられた日にや、此方の面が泥だらけだ。」

葉山は掌でするりと顏を撫て、欠伸を一つしたが、すぐに其の欠伸を溜息にして、

「しかし全く困つたね。」

「眞實に困つて了ひました。」

お種も亦溜息を吐いて、

「今貴郎の有仰つた樣な、怨襟いのを辛棒さへして居れば、私の身だけ

は立ちますけれど、それでは貴郎に對してもお氣の毒ですし、第一驚見さんの身が心配で御座います。彼云ふ方だから、終ひにはお氣でも狂つて……。」

「隨分御念の入つた心配だな。大丈夫〳〵。それなら保險附大丈夫だ。驚見が若し精神病の素質でもある人間なら、お類さんが死んだ時分に、もう早や立派に折紙が附いてるさ。」

「大丈夫でせうか……。」

「大丈夫だよ。そんなに心配せぬがいゝ。」

「でも　以前とは餘程調子が變つて居りますよ。爲さることも有仰ることも……。」

「事がお前の身に直接關係して居るから、一倍さう強く感じるのさ。案外先樣ぢや然うでないかも知れないぜ。」

隱居所の天井板の上を、鼠がチユウ〳〵鳴きながら驅け廻る音がした。

茶の間のボン〳〵時計が一時を打つた。

「ヤア。もう一時だ！　兎に角近いうちに、此方が知らない顏で驚見と會つて、好く先生の心を確めた上で、また一と智慧を搾るとしやう。まあ今夜は遲いからお前も眠るがいゝ。徹夜して相談したつて解決のつくこつちやなしさ……。」

葉山は恁う言つたが、コロリと横になつて、夜具をすつぽり頭から被つて了つた。

お種も致方がなく横になつたが、却々眠られさうもなかつた　明日はまた早く起きなくてはいけないからと、努めて心を安かにして眼を瞑つたが、忽ち髮の延びた顏の蒼白い柳之助の姿が、活動寫眞の樣に現はれて來た。同時に又其の人の口から出た言葉の一々が、蓄音機でも聞く樣に耳の中に響き初めた。

お種はパツと眼を開いた。そして惱ましい體に寢返りを打たせて、そ

つと傍の所天の樣子を見たが、葉山はもう夜具の襟から首を出して、前後も知らずぐう〳〵鼾を立てゝ居た。

「まあ何うして恁う呑氣で入らつしやるだらう……。」

お種は小さい聲で呟いて、哮ッと溜息した。

（八）

葉山はお種から柳之助のことを聞いた以來、表は呑氣でも心のうちは却々然う呑氣ではなかつた。しかし彼はそれが爲め、お種に嫉妬の念を起したり、十年一日の如うに、弟の格で取扱つて來た柳之助に惡感情を抱いたりする樣なことは決してなかつた。彼は飽くまで平常のやうな心持を保つて居る傍、如何して柳之助の腦髓から、お種と云ふ印象を去らしめたものだらうかと、其の事件には人に知れない腐心して居たのであつた。

七草が過ぎても葉山には妙案が浮ばなかつた。平常もならば、大概の難澁な問題でも、其の滾々として湧き來る頓才の力で、造作もなく釋き破つて、葉山は實に智慧者である奇才家であると、柳之助は元より、妻のお種も乃至會社の同僚などにも嘆賞されて居るものを、今度の一件に對しては、葉山は餘り智慧者でも奇才家でもなかつた。寧ろ愚者であつた。

其の愚者の葉山が、此の問題に接れてから十日目の夕方、辛つと思ひ附いた一案がある。それを手短に言へば、柳之助に無理〳〵妻を有たせると云ふことであつた。

「僕は妻なんぞ一生持たん！」

是は柳之助が平素口癖のやうに言つてる主義であつたが、葉山は彼に其の主義を枉げさせる爲には、什んな暴力でも、什んな壓迫でも加へて差支へないとさへ考へた。何故なれば、彼に這の主義を枉げさせない以

上、彼の生命の存在する限り、又お種の生命の此の世に保たれて居る限り、到底此の問題の解決を見ることが出來ないと思つたからである。

葉山はそれと同時に恁ふ云ふことを思つた。柳之助の亡き妻に執着したり、親友の妻に戀したりして、而も生に堪へない程煩悶の狀態を示すなどは、疑ひもなく彼の生理的作用から來るのである。即ち蓄積したる情慾の衝動を散ずべき、異性の肉體を求め得られないそれの不滿足からである。寧ろもう一歩進んで失望からであるかも知れない。其の反動として、一度彼の意に投じた異性に對しては、彼の精神感覺が驚くほど鋭く尖つて居る。此の感覺が病的に昂進して、彼は遂に憂鬱症に陷つて了つたのだ。悲觀の人間に傾いて了つたのだ。そこへ妻と云ふ藥を與へる。初めは彼のことだから苦くも感じるだらうが、一日二日と日が經つて行くと、きつと彼は求め得られなかつた或る物を得たのに滿足して、恁んな事なら、あんなに死んだお類に執着するのでなかつた。あれ程お種を想ふて苦惱するでもなかつた——恁う感じるに相違ない。そして大に愉快を覺ゆるに相違ない。甚く女の肉體を嘆美するに相違ない。此の愉快の情と嘆美の念とが、彼の心にすこしでも刻銘したらもう占めたものである。彼は此の愉快と嘆美との力で以て、自然〳〵にその病的精神感覺をにぶらして行く。さうなると彼の體に勇氣が出る。食慾も進むで來る。顏色がよくなる。健康が恢復する。其の結果暖で美なると迄は行かずとも、少なくとも現在の樣な淋びしい暗い、ジメ〳〵した生活から遠ざかつて行くことが出來るのである。此の理由で、今のところ喧嘩腰になつても、彼に妻を有たせると云ふことは、彼我の心を安んずる最良の策である——

葉山は生れて初めて、恁んな小六づかしい理窟を附けて、柳之助問題を解決するに努めたのであつた。

で、其の問題に對する解決の立案は就つたが、偖て其の妻として撰定

すべき女は誰だ。葉山が恁う考へた時、彼は立所に其女は矢崎道子――お種の從妹で元日に遊びに來た娘――であると思ひ附いた。道子は實に柳之助の妻として好適の女であると思つた。

第一道子は音樂者でヴイオリンが上手だ。柳之助もヴイオリンが好きだ。夫婦は性格の違つて居るのが、多くの場合納つて居る。そこで柳之助は沈默家でお人好、道子は辯舌爽かで勝氣の質だ。柳之助はお種が好きだ。道子は種子にそつくりで、而もお種よりは五つも六つも若い上に、猶お種よりも容貌好である。それから柳之助の好きな、お類もお種も中肉中背の體だ。道子も亦中肉中背の色の白い光澤のある皮膚を有つて居る。此れだけの對照を材料にして、自分が黑頭巾を冠つたら、どんな手品でも、どんな操りでも出來る。たとひ鐵の樣に堅い柳之助の主義でも、忽ち飴棒のやうなぐな〳〵にしてみせることは易い仕事である――

葉山は鬼の首でも捕つた樣に、電車から下ると直ぐ車に乘つて家に歸つて來た。

お種は相變らず屈托さうな顏をして、所天の歸宅を玄關に迎へたが、口元に淋びしい微笑を浮べて、

「今日は大さう元氣が好う御座いますねえ。」

「思ひ設けない拾ひ物をしてさ……。」

葉山は莞爾〳〵しながら靴を脫いて、ずつと座敷の方へ入つて行つた。

お種も其の後に尾いて行きながら。

「昇給でもなすつたのですか？」

「なか〳〵。」

「では不時なお錢でも……。」

「それもなか〳〵だ……。」

葉山は、蟹の泳ぐ樣な手附で、ホワイトシャツを脫きながら、又々お種の顏を見て笑つたが、

「まあ一杯飲りながら、悠然話さう。早く飯の仕度をするが好い。」
「もうちやんと出來て、貴郎のお歸りを待つて居りました。」
「やあ、そいつは有難い。調子の好い時には何も彼も好いもんだな。」
譯も言はずに、葉山ひとりで無上に嬉しがつて居るのを、お種はもどかしく思つて、
「そんなことを仰有らずに、早く聞かして下さいましな。私は貴郎の妻ですから、所天の悅びごとは一刻も早く伺ひたいんですもの……。」
と輕い洒落を言つて所天の顏を見た。
葉山は大に笑つて、
「とんだ所へ一心同體說を持ち出したな。何時でもそんな調子で此方に對する樣だつたら、此方もお前に何時までもホの字と行かう。嘘ならお前が今卒中で死んで見ろ、此方は隨分生埋にもなつてやるから……まあそんなに急ぎなさんな。唇にちよつとでも豬口が接れたら、お前が聞くのが嫌やだと言つても、此方で却々承知するこつちやない。皷膜に穴を穿けても聞かしてやる。」
「驚見さんのことで、何か好いお考へでも附きましたのですか？」
お種はふと思ひ附いたので恁う訊いた。
「へん。うつかり者奴！　今時分になつて、辛つと思ひ附いたと云ふ顏をして居やがらあ……。」
葉山は願をお種の方へ向けて突き出した。
「でも、貴郎が拾ひ物をおすつたと仰有つたもんですから……。」
お種も心嬉しさを感じて、甘へた樣な調子で言つた。
「拾ひ物ぢやないか。考へて〳〵、考へ拔いても出ないで居る所へ、ひよつこり妙案が浮んだら、つまり拾ひ物ぢやないか。」
葉山は恁う言つてるうちに、洋服を軟い褞袍に着換へて了つて、さつさと茶の間の長火鉢の前へ坐るのであつた。

お種は電燈をひねつたり、食卓を据ゑたり、銅壺に銚子を沈めたりして、軈て食事は初つたが、葉山は何を感じたのか、却々口を開かなかつた。

お種は御飯よりもお菜よりも、柳之助の一件を聞くことを待ち焦れて居たので、

「さあ、ちよつとでも猪口が唇に接れたらと仰有つた癖に、もう貴郎、それで三杯目ですよ。早く聞かして下さいましな。」

と急ぐ樣に言つた。

葉山は臺所で働いて居た二人の女中の後姿を、人指でちよつと指して、

「ね、うるさいから、晩にお寢間で言上することにしやう。それに附いて種々込み入つた相談もあるし……。」

と聲を潜めて言つた。

「それもさうですねえ。」

お種も所天の言ふことは尤もだと思つて、それつきり何も言はずに箸を取つた。

葉山は串談を言ひながら、ちびり〳〵飲んで、八時すこし前に漸く食卓を下げさせた。それから三時間ほど保を合手に戯け廻つて、臥戸に入つたのが十時過であつた。

「さあ、今度は話さう。」

葉山は先夜の樣に蒲團の上に胡座を組いて、長煙管で煙草を喫しながら、今日途々考へて來たことを逐一お種に語り聞かせて、

「十日の間、青息吐息で苦しんだ果が、辛つと恁んな考へが浮んだのさ。浮んでみれば馬鹿〳〵しい程造作がないやうだが、さてそれが動きのとれない妙案だと悟る迄が却々の骨なのだ。餘程の智惠の要ところでね。」

お種とても、柳之助に妻を有たせると云ふことは　此の事件を解決する爲には最善の策であると思はぬでもなかつた。思ふことは思つても、

それは丁度霞を透して向山の花を見るやうな朦朧したもので、決して具體的のものではなかつた。勿論柳之助の對者に從妹の道子を引き出して來るなぞは、全く心にもなかづたことである。で今良人の嚙んで呑む樣な詳しい話を聞いてみて、如何にもそれは妙であると思つたのだが、果して良人の考へ通り、ことが運ばれるか如何かは、聊か疑問であつたので、

「眞度にそれが纏るものなら、結構なことですけれど……。」

「けれど、鷲見は承知すまいと云ふのだらう。」

「えゝ。然うで御座います。」

「なにそれなら、大丈夫金の脇差しさ。それ今も言つたらう。道子はヴイオリンが上手、鷲見もヴイオリンが大好だ。其の上道子は、お種さんよりも若くて好い容貌と來て居る。此方の黒頭巾の冠り樣一つで如何にでもなると云ふ寸法さ。」

葉山は柳之助の心のうちを見透した樣なことを言つた。

「でも鷲見さんのことですもの、如何だか分りは致しません。」

「そこで大丈夫……とは思ふが、萬に一つ……いや億に一つ鷲見が拒んで承かないとするとだね。それぢや以來絶交だと嚇し文句を並べる迄のことさ。どうだい妙いだらう。鷲見が此方に絶交されたら、死ぬより外仕方があるまい。先生だつて生命が惜しいから、そこで貰はうと來る。貰つてさへ了つたらもう占めたもんさ。」

葉山はにや〳〵笑つて居る。

お種はすこし呆れた顏をして、

「いくら何でも、そんなことをなすつちや、鷲見さんは餘りお可愛さうぢや御座いませんか。」

「何が可愛さうなもんか。お前はすぐに然う情を酌むからいけない。それが即ち死人の樣な鷲見を生かす良手段なのさ。物に例へて言ふと、丁

度下科醫が腫物患者の手術をするやうなもんだ。患者の肉體にナイフを當てるのが氣の毒だけれど、其の代り腫物を快して、患者を樂にしてやると云ふ恩典がある。此方の驚見に對する手術も、まあそれと同じ譯さ。なに關ふもんか、少々許り痛い思ひをさせても……。」

言はれてみれば、お種にもそれが尤もの樣に感じられたので、

「では、驚見さんの方はそれで宜いとして、今度は道子の方ですがねえ。あゝ云ふ風に見えて、却々虚榮心が強いから、當世向でない驚見さんの樣な方には……。」

「さあ、そこが聊か問題だね。」

と葉山はお種の言葉を中途で奪つて、恁う言つた。そして上眼遣ひに欄間のあたりを見ながら何やら考へて居たが、

「いや、承知しない樣なこともあるまいよ。そりやお前の云ふ通り、如何にも驚見は偏屈で野暮で、當世のハイカラぢやないが、珍らしく實意のある男で、それに關はないから贏れてこそ見えるが、男振りも滿更ではなしさ。其の上天下の孤獨で、長火鉢の前で瞋んでる姑面もなければ、鬼千疋の煩ひもない。月收は七拾圓あるから、二人暮しなら可也贅澤はしても、しまるところをしまつてさへ行けば、毎月衣服も調新るし貯金も出來る。全く嫌やだと云ふ女の方が嘘さ。俺が女なら恁んな家は後足で砂だ……おつと是は少々言ひ過ぎたかも知れない。」

葉山は頭を掌で叩いて苦笑した。

お種もつい誘き出されて苦笑したが、

「貴郎はお話がお上手だから……。」

「なにも上手を言つてるんぢやない。それが眞實の話さ。」

葉山は煙管を一と喫ひ强く喫つたが、それを小形の唐津燒の火鉢にトンとはたいて、

「殊には、芝のおぢさんやおばさんも、道子の一身はお任せするから、

どうか相當の處があつたらお世話を願ふと言つてる位だし、又本人の道子も、内々そのことは承知で居る樣子だし、此方から音が出さへすりや、恐らく嫌やを言ふ樣なこともあるまいよ。」

「なんだか、道子が私達の爲に、犧牲にされる樣なもんですねえ。」

お種は眼をパチ〳〵させながら、心配さうに言つた。

「犧牲……。」

葉山はちよつと眼を嗔つてお種を見たが、

「そりや元來、此方の爲めにすることには相違ないが、何も嘘や詐りを言つて、惡い所へ呉れてやるのぢやなし、人前を憚らずに打ちまけられた話しでこそないが、決して罪惡ぢやない。論より證憑、道子の亭主として、鷲見は不足のない男子ぢやないか。」

「それや然うですけれど、それでも何だか道子に濟まない樣な氣がして……。」

「またそんなことを云ふ。今迄で御尤もづくしで居たものを、如何してさう掌返しに氣が變るんだい。道子でなければ、所詮この問題が解決が出來ないから持ち出したのぢやないか。何時もの酒落と思はれちや此方が迷惑だ！」

葉山はすこし怒つとした顏をして言つたが、直ぐに色をなほして、

「ぢやお前がお嫁に行くが好い。」

「あれ、またそんな嫌なことを……。」

「それ見ろ、そんなことを言ふ癖に、道子に氣が濟まないもんだ。」

熱心な良人の言葉に動かされ、お種も今はすつかり其の氣になつて、葉山と共に事を運ぶことに決めたのである。

それから二人は、一週間ほど道子に遊びに來て居て貰ふこと、道子へも柳之助へもことの仔細は秘密で、一日家で會食させやうと云ふこと、其の時の二人の樣子を見た上で、先づ柳之助の方を先きに說くことなど

を相談した。

此の相談が終りを告げる時分には、葉山もお種も既う蒲團の上に横になつて、然も眠むさうな欠伸を爲合つて居たが、それが軈てうつら〳〵と夢に入るのであつた。

（九）

柳之助は、曩の日お種に對して、どうした感情の刺戟で、あれ程思ひ切つたことを打ち明けたのか、それを今から考へれば、何だか氣耻しくも思つたのであつた。心で思ふ以外に、何か求むる所でもあつて、あんなことを言つたのであらうと、お種さんは變に思ひはすまいかと柳之助は危み且つ恐れもした。彼は恁う危み恐れて居る傍から、自分はそれ程お種に對して切實な情緒を抱いて居ると云ふ事實を、最も強くそして鋭くお種の胸に感銘させたのをば、又堪らない程嬉しくも感じるのであつ

た。何だか氣がワク〳〵する樣にも、渾身の血が動いてむづ痒い樣にも感じたのである。

彼は此の感じが更に昂進して來ると、自分のお種に對する求望が、必ず汚ない劣情の緒を辿つて行くやうになるであらうとは、彼の意識の底に、最も朧氣な極めて希薄な影の樣な形を以て潜在して居た。それが段段明瞭に見え初めて來たとき、彼は彼自身の良心に顧みて、貞淑で行儀の正しいお種や、兄とも頼んで居る親友の葉山に對して、自分は何と云ふ淺ましい人間だらうと、其の心を切に〳〵責むるのであつた。同時に又彼は非常な恥辱でも與へられた樣に感じて、覺はず悚然と身を戰慄させるのであつた。

「自分は葉山に灑いで居るのと同じ感情をお種にも灑いで、そして深切な感情を以てお種から報ひられて居さへすれば、それで滿足なんだ滿足に思つて居るのが人間なんだ……。」

柳之助は心のうちに、恁う云ふ憲法を立てゝ、以來それを堅く〳〵守つて辛つと安心した。そして仍且お種は愛すべき人、葉山は懐しい友であると思つて居た。そして仍且お種の寫眞を袂に入れて、學校にも行けばお類の墓詣にも行き、又散歩にも出懸けるのであつた。そして又時々煩悶もし、悲哀にも打たれて居るのであつた。

柳之助は元日以來、月の半過ぎまで葉山家を訪づねて行かなかつた。行きたいことは飛んでも行きたいのだが實はお種に對して氣耻かしいのと、それにお種が若しや彼のことを葉山に告げはすまいかとの氣懸りからであつた。豈天お種さんは葉山には告げない、よしんば告げたところで、葉山のことだから何うも思ふまい、思つたところで、自分を無禮な奴だ、淺ましい奴だと、惡感情を以て自分の胸を測度る樣な、そんなことは決してない筈である。行かう〳〵。關はず行つてみやう――柳之助は恁う勇氣を驅り出しては見たが、それでも何だか妙な具合で行かずに居たのであつた。

或る日の午後の三時頃、柳之助は寒い北風に吹かれながら、例のくすんだ樣な淋びしい顏をして下宿に歸つて來た。彼は二階に上るが否や、洋服も脱がずに机の前に胡座を組いて、ポケットからお種の寫眞を出して小間昵つと眼を注いだ。軈て其の寫眞を机の抽出しに收めて、俶爾と起ち上り、今度はお類の油繪を仔細に眺め初めた。其の時、

「驚見さん、お手紙が參つて居りますよ。」

と下の女房さんが片手に臺十能、片手には一通の書簡を特つて二階に上つて來た。

柳之助は慌てた樣に油繪の前を離れて。

「さうですか……。」

恁う無愛相な挨拶をして、渡された手紙の差出人を見ると、それは懐しい友の葉山からであつた。

柳之助は、葉山から手紙を貰はうと云ふことは非常に珍らしい事實であつた。交際してから十何年と云ふ長い月日のうちに、是れで三度目であつた。用がありさへすれば、必ず自分でやつて來たものが、自分で來ずに郵便をよこす。太だ變だ。若しや例のことがお種の口から葉山に知れて、それで自分を叱めて來たのではなからうか――柳之助はぎつくり胸に應へて、封を切らぬ先きから手が顫えて心臟が轟くのであつた。

柳之助は火鉢の前に坐つて、思ひ切つて手紙の封を押し切つた。そして恐ろしい眼附をして、葉山が自慢の美しい筆蹟を讀み初めた。

恐怖の滿ちた柳之助は眼は、一行から二行、二行から三行と讀み移つて行く毎に、段々和な光りを發して來た。彼は全部讀み終つた時、彼の淋びしい口元に微笑の影さへ湛ふのであつた。

葉山の手紙のうちには、今柳之助の心配した樣なことについては、たつた一行も明瞭に書いてはなかつた。寧ろ全文を通じて、何の文字にもそれらしき怪しい意味を潜ませた箇所すらなかつた。柳之助は、平素の優しい洒落な呑氣な葉山と、直接會つてでも居る樣な、愉快な心地で此の手紙を讀んだのである。

葉山の手紙と云ふのは、一番初めに自分の方の無沙汰の詫をかき、それから柳之助の方の無沙汰を咎め、中程へ行くと、今日知人から君の大好物な鰻を三本貰つた。それを御馳走するから、萬障を繰り合せて夕方から來て呉れ。若し病氣で寢て居るなら　夜具を被ぶつたまゝ俥でやつて來い。此方は鶴の樣に首を長くして待つて居る――恁う書いて、終ひには、鰻は頭が小さく、胴に水色の斑點があつて、おまけに食頃の中筋と來て居るから、燒いたら定めて美味からう。舌を拔かさない爲の用意に細引でも持參して來るが好いと、鰻の講釋やら串談やらをごた〳〵書いてあつた。

柳之助は嬉しくて〳〵堪らなかつた。鰻の御馳走も好いが、それより

も久しく會はなかつた葉山の上手な話を聞くのと、懷しいお種の顔を見るのとが樂で〳〵ならなかつた。けれども何だか、お種と葉山に顔を合はすのが、極りの惡い樣な氣もして、

「行くのを廢さうかしら……。」

とも思つたが、それでは好物の鰻も食べられない。お種にも會はれない。葉山にも會はれない。其の上葉山にはきつと怒られる。それが苦らい……。

「矢張り思ひ切つて行かう……。」

柳之助は非常な決心でもした樣な態度で、手紙を卷きながら恁う獨言いたが、偖て行くと決めると、一刻も靜止として居られない樣な氣がして、行くものなら今からでも行つて了ひたい。夕方には未だ二時間程もあるが、此の二時間を什うして待たう――彼は恁う思ひながら、餘り日光の透らぬ薄暗い陰氣な部屋の中を、隅を辿つて神經的に歩いたが、

「湯に行かうな……。」

彼は不圖、お正月になつてから洗湯に行かなかつたことを思ひ出した。で、手早く洋服を和服に着換へて、鼠色に染つた――茹豆の腐つた樣な香のするタオルを下げて、近所の鶴の湯へ浴びに行つた。湯から上つて痩せた體を――それでも血腋の赤く循環して息の立つて居る體を、大鏡の前に映らせた時、彼は一番先きに、髪の延びた髯の薄汚なく生へた、くすぶつた樣な自分の顔を見て、何だか監獄から上りだての人のやうに淺ましく思つた。社會とは沒交渉の人のやうにも感じた。そして元日の午後に來たお種が、「大そうお贏れなすつた。」と言つて、嫌やさうに眉を顰めた――彼の顔が一所に鏡に映つて居る樣にも感じた。彼は床屋へ寄つて行かうと思つた。お正月になつてから初めて行くと云ふのに、恁んな陰氣な顔を、葉山の前にもお種の前にも晒したくない樣な氣もされたので――

以前ならば恁んなことに氣の附く柳之助ではなかつた。髪が延びて脂垢が集らうが、髯が生へやうが、衣服の襟が垢で光つて見えやうが、袖口が切れやうが、そんなことには氣の附く彼ではなかつた。氣が附いてもそれを何うかしなければならぬ柳之助ではなかつた。夫れが今日に限つて氣の附くのは――餘程不思議だ。實に妙だと彼自身もさう思つたのであつた。

髪を刈つて、見違へる樣な男振になつて――それでも仍且眉根の邊には疊りの見える柳之助は、急いで下宿へ歸つて來た。そして昨年お類の野邊送りをした日の外、體に着けたことのない縞の糸織の綿入を着て、博多の帶を占め、其の上に魚子の紋附を羽織つた。彼は恁うして下宿を出て、紫色に沈んで行く冬の夕暮の中を、例の洋杖を打ち振りながら、すた〳〵歩いて行つたのである。

（十）

葉山は四時すこし廻つた頃、會社を退けて歸つて來た。そして洋服を手早く平素着に換へてから、長火鉢の前で一吹すつたが、

「どれ、御馳走の鰻でも割かうか……。」

恁う言つて流元へ行つた。彼は水道で瀧を打たせて置いた。大な目笊の中から、によろ〳〵する鰻をつかんで俎の上へ載せた。そして頭に丁と錐を刺して、左手で動き廻るのをずつと撫てながら、小形の出刄を首筋の邊へちよつと當てたと思ふと、其のまゝ紙でも割く樣にぺり〳〵と音さして、出刄を引き下げたのである。水色の肉が二片に裂けて、細胞がぴくりぴくり動いた。

「上手いだらう。是でも昔しは鰻屋の板場をやつたもんだよ。」

葉山は恁んな器用な庖丁を使ひながら、氣味惡るさうに見て居た女中

達に串談を言つた。彼等は何とも言はずに、唯だ顔を見合せて笑つた。

軈て葉山は三度び同じことをしてから、俎の傍を離れ、綺麗に手を洗つて了つたところへ、お種が臺所に出て來て、

「上手に割けましたことねえ。」

と、大皿に並べてある鰻を見たが、その眼を更に葉山の方へ移した。

「もう俺の責任は解除されて、今度はお前の番さ。上手に燒いてお呉れよ。脂肪くさくない樣に、脂肪の拔けない樣に、生燒でない樣に、こがさない樣にね……。」

葉山は恁う言ひ捨てゝ、ずん〳〵二階の方へ上つて行つた。

暮に取り換へた許の新しい疊の表が、電燈に映じて白く光つて居る八疊の間の中央に、蠟塗の臺子火鉢を据ゑて、其の傍には八分目程櫻炭を盛られた、氣取つた夕顔の烏府が置いてあつた。葉山は袂から數島を一本出して、それに火をつけてから、ずつと緣側の欄干の前へ進んで行つた。そして小間く、暮の色に包まれた庭の植込みの　未だ生氣を發して來ない凋落の痕を眺めたが、軈て、

「もう來さうなもんだ……。」

恁う呟いて、今度は門の外へ眼を遣つた。けれどもそれらしい姿は見えなかつた。

葉山は雨戸を閉め障子を閉めて、再び火鉢の前に坐つた時、今迄隱居所で、保を合手に遊んで居た筈の道子が上つて來て、

「兄樣、お客樣が入らつしやいましたよ。」

と告げた。そして座蒲團を火鉢の前に敷いた。

「來たのかい。それは好かつた。」

葉山が元氣よく言つて、起たうとした途端に、柳之助は突然そこへ現はれて、

「來たよ！」

と、太く極りの悪い様な顔をした。

「好く來たね。來たは好いが、今お隣の家へ入らなかつたかい。」

葉山はにや〳〵笑つて居た。

「いえや、何故……。」

「餘り久し振りだから、門を取つ違へたかと思つてさ。」

「豈夫……。」

柳之助は苦笑したが、未だ坐りもせずに、然も珍らしさうに座敷のうちを見廻して居た。

「何だね。お正月初めてだと云ふのに、お目出度うも言はずにによつきり立つて……昨年中は紋附の夜着だつたが、今年は紋附の門松だと云ふ洒落でもなからう。まあお坐んなさい。」

「君は相變らず、好く饒舌るね。」

柳之助は、度膽を抜かれた樣な顔をして、あはたゞしく火鉢の前に腰を据ゑた。

道子は階子段のところで、その柳之助の狀態を見て居たが、クス〳〵笑ひながら下へ行つた。

此の時葉山は、不思議さうな――寧ろ驚いた樣な眼附をして、上から下まで柳之助の服裝をじろ〳〵見渡した。

お種の話では太く羸れて居たと云ふことだつたが、今見ると髮もちやんと刈つてあり、髯も綺麗にあたられて、蒼白い顏が妙に光澤〳〵して居るやうにも見えた。其の上滅多にないこと魚子の紋附や絲織の衣服なども着て居るので――

平素の柳之助を見て居る習慣のとれない葉山の眼は、山の芋が鰻に化つたよりも、猶激しい變化として彼の服裝や男振を眺めた。そして今度に限つて、什うして恁んな服裝をして來たのだらうと、大に怪しくも思はれた矢先へ、是は必然、彼の好きなお種に見する爲めの苦心だなと云

ふ疑がひよつこり顔を出して來た。葉山はかう思ひ附くと、內心聊か穩でない氣もされたが、其の氣はすぐに消え失せて、何だか柳之助の心のうちが、氣の毒で〳〵ならない樣にも感じた。又哀れなやうにも滑稽なやうにも感じたのである。

葉山の胸がすこし鎭定ると、今度は柳之助の此の變つた服裝が、願つても出來ない幸ひのやうにも感じられた。それは今夜柳之助を招んだのも、實は鰻の御馳走に事寄せて、彼にお種そつくりな道子を見せたい計畫であつたのだ。處が衣服を好いのに着換へて、髮を刈つて、髯をそつて來いでは、如何に野暮な柳之助でも變に思ふ。殊には彼がお種に對つて、あゝした感情も訴へた矢先であるし、ひよつと氣を惡くされても滿らぬことだから、それで故意と何も言つてやらなかつたのだけれど、其の實は例の垢ずんだ衣服を着て、髯もしや〳〵の陰氣な顏で來られはすまいかと、葉山もお種も內々はら〳〵して居たのであつた。そこへ運よく綺麗になつてやつて來たので——

「何うしたんだい。甚くめかして居るぢやないか。」

葉山は聞かずともいゝことを柳之助に聞いた。

チユリーの箱を、指で丁々叩いて居た柳之助は、妙に悄げた顏をしたが、

「お正月初めてだからさ……。」

と、顏の割合に無雜作な返言をした。

「如何にも、それが禮だと云ふのだね。」

葉山は茶を侑めながら言つた。

柳之助はそれには應へないで、

「僕は此の頃また不眠症が起つて困る。」

と唐突に言つて眉を顰めた。

「あんまり谷中へお百度を踏むからさ。もう足懸け二年にもなると云ふ

のに、大概にして諦めを附けたら好からう……。」

「もう僕は諦めとるよ。」

「ぢや何故出懸けるのだ？」

「習慣の惰性さ。」

柳之助は明瞭言つたが、又重い調子になつて、

「行つても此の頃は何とも感じなくなつた。悲しくも思はん代りに、また氣も晴れはせん。唯だ淋びしくなると、漫然として足を向けるのだ。」

「それぢや、別段不眠症を起したり、くよ〳〵煩悶をしたり、陰氣な顏をしたりしなくとも好い譯ぢやないか……元日に妻が行つたらう、其の時の話では、君は又お類さんが歿くなつた當時と、同じ樣な悲嘆に暮れて居ると聞いたが……。」

「えつ！　妻君がそんなことを君に言つたのか……唯だそれだけか……。」

柳之助は然も不安さうに訊くので、

「さうさ。唯だそれだけさ。」

と葉山は安心させて置いて、

「妻も君のことを、非常に心配して居るよ。」

「さうか、心配しとるのか。」

柳之助は上眼遣ひに葉山を見たが、其の眼を床の間の幅物にちよつと注いで、

「どうして恁う年中氣が欝ぐのか、自分で自分が釋らないんだ。僕にはまるで歡樂の世界と云ふものがないからな。悠久に恁んな不愉快な思ひをして死んで了ふのだらう……。」

と哮つと溜息を吐いた。

葉山もなんだか身に浸みて聞かされた。そして、今君の求めやうとする歡樂の世界が、君の鼻の先きにぶら下つて居る。そんなに煩悶するで

はない。くよ〳〵悲觀しなくともいゝ。今に暗い夢から醒めて、光るい現實が迎へられて來るから、しばらくの辛棒だ――葉山は恁う心のうちに思つて、柳之助の顏をしみ〴〵見たのである。

「君は、不愉快〳〵と口癖のやうに言ふが、それは君自身が强ひて不愉快にして了ふのだ。君の決心一つで、どんな明い世界へでも、どんな美しい世界へでも、出やうと思へば出られるのだ。決心一つで……。」

葉山はこれだけ言つて口を噤んだ。

「決心と言ふと……。」

柳之助は聞き咎めた。

「妻君を貰はうことさ……。」

と、葉山はうつかり言はうとした口をきつと閉ぢた。そして何とか應へなければバツが惡いと思つたが、折り惡しく急には妙い考へも浮んで來ないので、仕方がないから、

「さうだね。何と言つたら好いかな……。」

と、頗る窮した前詞をおいて、

「何か大發明に着手するのさ。そして朝から晩まで、一心不亂に其のことを許りに熱中するのさ……。」

葉山は我ながら呆れ果てた程、愚な說明だなと思つたが、是より外には即答が出來なかつたので――

「何のこつた。どんな妙案かと思つたら……。」

果して柳之助も、智慧者の葉山にも似合はぬ、幼稚なことを言つたものだ――と云ふ樣な顏をして言つた。

葉山は柳之助の失望した樣な、そして劍突を食はした樣な言葉を聞いて、內心恐縮もしたし、又下腹の痛い樣にも思つて居る矢先へ、お種がぽつと上氣した顏を、俯向勝ちにして上つて來た。そして聊か頓ひを帶んだ聲で、

「鷲見さん、好く入らつしやいました。」

柳之助は座蒲團を辷つて、

「はあ……。」

とお頭禮をしたが、其の頭を擡げながら、何時見ても美しさが變らぬ——しかし氣の故か今夜は何だか愁に沈んで居るらしいお種の顏をば、盜物でも覗く樣な眼附でそつと見た。そしてすこし吃つた樣な調子で、

「奥樣、先日は非常に……非常に失禮でした。どうか惡しからず……。」

「いゝえ。何う致しまして、私こそ……。」

お種は恁う挨拶して、是も瞬し氣に柳之助の姿を見たが、元日のそれとは違つて、全然生れ變つた人の樣に思へた。そして滅多にないこと恁う着飾つて來たのも、ひよつとしたら私に——ではないかと思ひ附くと、何も彼も承知な所天の手前、お種は顏から火が出るやうであつた。

お種は元日以來、柳之助には餘り會ひたくないものだと思つて居た。會へば氣の毒な思ひもするし哀れにもなる、せめては結婚の問題が極る迄は、顏を見せたくない見たくもない——毎日恁んな思ひをして日を暮したが、今夜は、其の見せたくもない見たくもないと云ふ顏をば、和な氣持で見もし見せもする爲めの準備の會で、それでわざ〳〵柳之助を招んだのだから、お種は下に許り居て出て來ない譯にも行かなかつた。で、胸を動悸つかせながら、怨襟い思ひで上つて來ると、思ひがけない絲織の綿入に黑魚子の紋附を、美しく着飾つた柳之助が居たので——

葉山はお種の葉山に氣兼をする程、それ程惡い感情は有つて居なかつた。寧ろ平氣の平左で濟しては居るのだけれど、恁う二人が膝を突き合はして、一人は嫌な眼附をするし、一人は顏など紅くする、それを眼前見せらるゝと云ふのは、たとひ平素鷲見の氣質も知り、妻の心のうちも洞察いて居る葉山でも、餘り平和な心持はしなかつた。

「仕度が出來たら初めやうぢやないか。何だか喉佛が催促するやうだ。俺の喉佛は日蓮宗と見える……。」

葉山は全然お種に言ふでもなく、又全然獨言でもない樣な工合に言つた。

お種はそろ〳〵起ちかけた。

柳之助は解せない顏をして、

「喉佛が催促するとは、僕にも解つとるが、喉佛が日蓮宗だとは何う云ふ意味かな。」

葉山は苦笑して、

「呑んめう法蓮華經と云ふ譯さ。」

「成程！　妙い晒落だな。」

柳之助も苦が笑ひした。

お種は、平素なら又初つたと、顏を顰めるところだけれど、此んな場合だけに眞から所天の洒落が嘻しかつた。

で、心を直して下へ行かうとした出會頭に、坊主頭の頰の紅い、くりくり肥つた保は、うん、こしよ〳〵を言ひながら上つて來て、突然お種の袂に取り附いたが、

「母あちやん、おばちやんがね、もうお二階へ運んでも……。」

と、あとを言はないで、傘へた袂を打ち振るのであつた。

お種は莞爾り笑つて、

「お丶好い子だこと。坊やは……おばちやんのお使ひに來て呉れたのかい。」

と保を抱き上げて、階子段へ片足をかけた時、

「おい〳〵。お早くお賴む申しますよ。」

葉山が急き立てる樣な聲で言つた。

（十一）

「御免下さいまし。」

と、香水を紛と匂はして銀鈴を振る樣な聲で言つて、大い圓形の黑柿の食卓を、葉山と柳之助の間に据ゑた女は、よもや今夜の會食の裏面に仕懸の潜んで居るとは夢にも知らぬ道子であつた。

道子の此の夜の服裝は、派出な大島の重ねに、青磁色のバッとした、ヌーボー式の模樣のある羽二重の丸帶を締め、その上にお納戸の勝つた縞の吉野お召の羽織を着て、紐は殊更凝つて細打の黃金鎖を下げて居た。

道子は階子段の處から三四度往復して、仕出屋からとつたらしい、二三品の料理を食卓に置き並べた。そして葉山と柳之助とにお酌をしてから、鰻でも取りに行つたのか、一寸此の場を中座した。

柳之助は葉山の玄關へ來た時分から、此の女が氣にかゝつてならなかつた。女夫れ自身よりも、寧ろ女の顏が氣にかゝつてならなかつた。どうして恁うお種さんに似てるだらう。お種さんは髷を結つて居る、此の女は普通の廂髮を結つて居る、それでさへ恁う似てるのだ。若し此の女が、髷でも結つたらどんなに好く似るのだらう。實に瓜二個と云ふ諺はあるが、是程よく似た女はあるまい。一體此の女はお種さんの何だらう、お種さんには妹がないことは、かねて葉山から聞いて知つて居る。すると從妹かも知れない……

葉山のことだから、何れあとで話して聞かせるだらう……

柳之助は恁う考へて、女の方はそれなりで濟まして居たが、濟まされないのは料理の數であつた。葉山と自分と二人ぎりならば　何も四人分も並べる必要もないのに、それを彼の女は四人分並べて行つた。そこで柳之助は甚だ妙に思はれたので、

「僕の外に、誰か客でも來るのか……。」

恁う葉山に訊いた。

葉山は口元まで持つて行つた猪口を急いで呷して、それを柳之助に差しながら、

「來るさ。もう二人來るさ。」

「そりや困る。僕は困る！」

柳之助は眼を睜つた。

「又初めたよ。」

葉山は彈く樣に言つたが、

「だから、手紙にも會食だと斷つてやつたぢやないか。どうして君は、何時までも其の癖がとれないだらう。眞度に好くない癖だ！」

「しかし、僕は君と二人ぎりの會食だと思つとつたもの。」

「ぢや、四人だと知つたら、來ない心算であつたのかい。」

葉山が恁う突つ込んで聞くと、

「……。」

柳之助は然うだとも言ひかねて、もじ〳〵して居るので、葉山は此の上追求するのも可愛さうだと思ひ、

「處が君の嫌ひでない客だから、まあ安心して居たまへ。」

と笑つて見せた。

それでも柳之助は、何だか氣にかゝる樣子で、

「誰だ。其の客は……。」

「もう直き來るよ。」

階子段のあたりで、艶めかしい笑ひ聲がして、保を連れたお種と、それから柳之助の疑問の的となつた道子が、鰻をのせた大皿を手にして座敷に現はれた。そして、

「では、御陪食さして頂きましやうか。」

と設けの席に就くのであつた。

「是がお客さ。」

葉山は柳之助の顔を眤ッと見た。

「君は隨分人が悪いな……。」

柳之助は苦笑しながら言つた。

「未だ君には紹介しなかつたが、此の別嬪さんは家内の従妹で、矢崎道子と云ふ方さ。上野の音樂學校出で、而もヴイオリンの名手で、おまけに賣物だよ。」

「あら、兄様、嫌ですわ。そんなことを有仰つて……。」

道子は恁う葉山をとがめたが、其の顔には抑へ難い誇の光が輝いた。

お種はクス〳〵、袖で口元を被ふて忍び笑ひをして居る。

葉山は、今度は道子の方へ恭しく向き直つて、

「此の方はね。某の親友で鷲見柳之助君と云ふ、物理學校の……。」

「存じて居ります。」

道子は莞爾り笑を浮べて、すこし俯向き加減に畏つて居る柳之助に目禮しながら、恁うはしやいだ樣に、葉山の言葉を中途で奪つた。

「やあ、此いつは大失敗り！」

葉山は掌でぴつしやり額を打つて、

「什うして知つてるかい。」

「先程、姉さんから伺ひましたわ。」

「然うか。……兎に角鷲見も道子さんも、以來御別懇に……。」

葉山は呷いと猪口を干した。

「どうぞ、不束者ですけれど、以後は宜しくお願ひ申します。」

道子は改つた調子で柳之助に挨拶した。

柳之助は慌てた樣に、吹末矣のチユリーを火鉢の灰にさして、

「はあ。宜しく……。」

恁う挨拶を交はしたかと思ふと、手早く猪口を盃洗でそゝいで、

「ひとつ進げます！」

と然も猪口を突き附ける樣な調子で、道子に献した。

道子は面喰つた樣な顏をしたが、軈てそれを受取つて、

「どうも有難う御座います。」

傍でお種が輕く酌をしてやつたが、其の銚子を柳之助の方へ向けながら、葉山に對ひ、

「貴郎、驚見さんにお一つお献げなすつたら如何で御座います。」

「おう、然うだつた！」

葉山は一息に飲んで柳之助に献した。

「さあ、お酌いたしましやう。」

「いや、どうも……。」

柳之助はそれを受けて一口呑んで食卓に置いたが、直ぐに火鉢の灰から例のチユリーを拔き取つて、すぱ〳〵喫ひながら、頻りと何か考へ込

んで居る。

葉山はそれを熟々眺めては、面白くない樣にして居たが、

「ひどく考へ込んで居るぢやないか。考へ込むのは君の十八番だけれど、今夜だけ其の十八番は願下げだ。」

柳之助は非常く氣の毒の體で、

「僕は何も考へちや居りやせんよ。」

と、葉山の言葉を打ち消す樣に言つた。

葉山はすこし氣色を直して、苦笑しながら、

「考へちや居ないが、唯だすぱり〳〵煙草を喫つてるだけなのか……實はね、君もお正月初めてだし、此方の別嬪も亦お正月初めてだし、どうせ御馳走するなら、喧かな方が好いと、それで一所に會食することにしたのさ。だから、君も其の心算で、大に飲んで大に食つて吳れなくつちや面白くない。時に君の大好物の鰻はどうだ。」

「非常に美味いな……。」

柳之助は、此の時許りは眞から嘆美した樣に、元氣づいて言つた。

「さうか。そいつは有難い。何しろ鰻は御馳走の骨子だからね……燒加減は上等だらう。」

「劫々上手に燒けとるよ。誰が燒いたのだ。」

「奥方〳〵。」

「奥樣が燒いたのですか。實に感服ですね。鰻屋で食ふのとは、ちつとも違つと居らんですよ。」

柳之助はお種の力に眼を注いで言つた。

「お賞に預つて有難う御座います。」

お種は微笑した。

「燒加減もよからうが、又割き加減も上等だらう。」

葉山はクス〳〵笑ひながら言つた。

柳之助は至極眞面目で、

「割き加減とは……鰻を割くのに加減はなからう。」

「恐縮〳〵。いかさま加減は御座るまい。なに器用に割けてるだらうと云ふことさ。」

「そりや器用に割けとるさ。專門家が割いたのだらう。」

「仲々……。」

「ぢや君が割いたのか？」

「大當り！　此方が割いて奥方が燒いたのさ。夫婦がかりで調理したと云ふ、夫は〳〵意味深刻の鰻でね。」

葉山は口を開いて呵々と洪笑した。

お種も噴笑したくなつた口元を、急いで半巾で抑へた。

柳之助も道子も、誘き出されて遂ひ笑つたが、其の實、夫婦がかりで鰻を調理したと云ふのが、それ程可笑しいだらうかと、寧ろ大に笑つた

葉山やお種をおかしくて笑つた樣な顏をして居た。

「やあい、みんな笑つた！　やあい〳〵。」

今迄お種と道子との間を占領して、兩方の皿から好きな物をとつて、熱心にむしやむしや食つて居た保は、恁う吃驚する樣な甲高い聲を出して笑つた。

保の笑ひ聲には、皆んなは眞から笑はされたのであつた。

柳之助は、先程から恁んな風に話しもし、酒も飲み、好物の鰻も味つては居たけれど、其の心のうちでは、お種の從妹と云ふ初對面の道子が、氣詰りで〳〵ならなかつた。彼は今夜葉山と差し向で、そして傍でお種にお酌をして貰つて、ゆつくり胸襟を披かうと、夫を樂にして來たのであつたが、思ひもかけぬ若い女が客の一人で、それが而も澄んだ美しい眼をじろ〳〵働しては、柳之助の猪口を持つ手附から、箸の上下しまで、一擧一動を追すものかと云ふ樣に、注意の閃きを與へて居るので、彼は

此の閃きに會ふ毎に氣が詰つて〳〵ならなかつた。葉山が深切に招んで呉れたのであるから、嫌な顏をしては主人にもお種にも濟まない、殊には自分と同じ資格で席に列つて居る、此の客の女に對しても氣の毒である。無禮である。どうかして氣を直したい。氣を直さなければ嘘である――柳之助は恁う苦慮しながら、自分の偏屈な性格を、幾度も〳〵責むるのであつた。

然うかと思ふと、柳之助は此の氣詰りでならない道子を、一面に於いては、却々美だなと感服もして居たのであつた。初對面の若い女を美だなと感服するだけの餘裕のあつたのは、恐らく彼には今夜が初めであらう。此は柳之助自身でも寔に不思議であつた。彼が道子を美だと思つて感服したのは、彼の女の華麗を盡した流行を逐ふた衣服ではなかつた。又白いすべ〳〵した光澤の有る其の皮膚と肉附でもなかつた。お種に瓜二個で、而もお種よりも美な、彼の女の顏そのものであつた。「實に非常

な美人だな。どうして恁う似てるだらう」彼は絶えず恁う嘆美するのであつた。彼は道子を氣詰りな女として退け。そして非常な美人として嘆美して居た。そして氣詰りで〳〵仕方がない其の女が、若しぷいと座を起つて行つて、再び顔を見せなかつたら、自分は什んなに失望するだらう、什んなに淋びしい物足りない感じがするだらう――恁う思はるゝ迄柳之助は道子を美人として許したのであつた。

更に然うかと思ふと、道子が初對面の柳之助を、すこしも氣詰りとも思はずに、面白さうに笑つたり、言葉をかけたり、肴を食べたり、酒を飲んだり、如何にも此の座が歡樂の小世界ででもあるやうに、愉快に自由にそして男を恐れぬ態度を見ると、柳之助は第二のお島のやうにも感じてうんざりした。

酒杯が重つて、二合とは飲けぬ柳之助は元より醉つた。葉山も大分酩酊の氣味で、酒息まじりに熾んに酒落を連發しては、座を喧しして居たが、

「さう鏡を見て居ちやいかん。ひとつ貰はう。」

と柳之助に言つた。

「もう駄目だ！」柳之助はきつぱり言つた。

柳之助が、もう駄目だと言つたら、どんなに侑めても飲まないことは、葉山もかねてから知つて居るので、

「ぢや、鰻で御飯だ！」

食事が濟むと、コヒーが出る。シユークリームが出る。蜜柑が出る。四人は茶を飲みながら四方山の噺をしたが、葉山の口出しで、餘興の爲に道子にヴイオリンを彈いて貰はう　とになつた。道子は下手だから駄目だと斷つたが、葉山は却々承知せず、再三彈けとせがむので、内々は彈いて聞かして自慢の絲を誇りたかつた道子は、

「では下手ですけれど……。」

と、床の間からヴイオリンを持つて來た。

此の時柳之助は、歸りたくもあり、もすこし居たくもあり、どちらにしやうかと考へて居た矢先であつたが、自分の好きなヴイオリンをば、此の美人が彈くと云ふので、氣詰りは依然として變りはないが、聞かずに歸るのも何だか殘念な樣な氣もされるのであつた。で一曲聞いてから歸ることにしやう――恁う彼は心を決めたのである。

聽て道子は、ハイカラな白のリボンを、黃金の指環の輝く綺麗な手で解いて、空色の絹天のサックから中形のヴイオリンを取り出した。そしてそれを下豐の顎で一寸抑へ、腕を一直線に延ばして型の如く絲調べをしたが、今度は更に姿勢を整して彈き初めた。

一高一低、慟哭する樣な訴ふる樣な妙なる美音は、弓の辷る每に、人の感情をそゝる樣に絃の上を走しつた。

道子は、可也長い間弓を走らして曲を終へたが、

「やつぱり駄目ですわ。此の頃ちつとも彈きませんでしたから……。」

と哮つと溜息を吐いた。

「僕にや解らんが、隨分聞いてると哀れつぽい曲だね。」

葉山は煙草を喫ひながら恁う言つたが、

「しかし却々妙い。」

と賞めるのであつた。

お種は唯だ醉はされた樣な顏をして居た。

柳之助は、先程から感に堪へない樣な顏をして聞いて居たが、

「貴婦は妙いですな。實に感服したです。僕は音樂會などでも、時々ヴイオリンは聞いたですが、ロオレラインを貴婦程うまく彈く人は、實際少くなかつたです。實にうまいですな……。」

と、眞から嘆賞の聲を漏したのであつた。

「却つて恐れ入りますわ……。」

道子は恁う謙遜したが、口元のあたりには、禁じ得ない嘻しさが湛へ

られて居た。

「占めた！」

今迄トロンコの眼をして、二人の樣子を偷見て居た葉山は、突然に怎う頓狂な聲を出した。

皆なは眼を睜つて、一所に葉山の顏を見た。

「何を占めたのだ。」

柳之助は聞き咎めた。

葉山は下腹の痛いのを堪へながら、

「いや、なに油蟲さ！」

と疊のへりの處から、黑い絲屑の樣なものを一寸摘んだ。

（十二）

柳之助は會食以來、又太く鬱ぎ込んで了つた。髮が延びても刈らうと云ふ氣にはなれず、髯が生へても剃らうと云ふ氣持はしなかつた。毎日怠い樣な懶い樣な、休息の足りない體を無理に起しては、非常な努力で學校へ出勤して居るのであつた。

今日も學校から歸つて來て、何時もする樣に先づ哮つと溜息を吐いた。そして眉に八の字を寄せて痩せた腕を拱くのであつた。其の拱いた腕が非常に急激に解けたと思ふと、今度はむづと髮を抓んで、唸る樣な聲を出してぐい〳〵引つ張つた。其の果が疲れた樣に、ぐつたりと身を倒して眼を閉ぢるのであつた。深い暗い魔の息の通つて居る、廢山の鑛穴にエレベーターで突き下げらるゝ樣な、恐怖と不安に襲はるゝのは、彼が身を倒して眼を閉ぢた場合に好く起きる感覺であつた。

「吁、堪らん！」

彼は怎う叫んで、俶爾身を起すと、いきなり床の間の前に行つて、お類の油繪を眤ッと見詰めた。

それからお種の寫眞をポケットから出して、淋びしい顏をしたり、絕望の溜息を漏したり、急に感情が高潮して來た樣に、其の蒼白い神經的な顏が紅く輝いたり、然うかと思ふと、慟乎喪心した人の樣になつたりして、可也長い時間を、其の寫眞と親しむのであつた。

「妙だ！　不思議だ！僕は如何かしとる。」

柳之助は恁う呟いて、二三度半巾で眼を拭つた。そして又再び寫眞の表に眼を注いだが、

「矢張り駄目だ！」

遂ひに彼は寫眞を机の上に投出して了つたのである。

一度道子と會つた柳之助は、此頃お種の寫眞に對する時々、不思議で不思議でならない或る一種の作用を覺ゆるのであつた。彼は寫眞を熱心に見詰めて居ると、お種の髷が假々くづれて、豐滿した廂髪と變るのだ。そしてお種よりも眼の凉しい若い道子が、情熱の溢れた顏をして現はれて來る。其の變化の狀態が、恰度活動寫眞のフエルムが、瞬間から瞬間へ形を變へて行くのと同じことであつた。

柳之助は、是は疑ひなく視覺神經の作用であると意識はして居るけれど、現はれた形が、餘りにはつきりして、すこしの曇もなく見えるので、彼は怪しくも奇しい感じを抱くのであつた。

すると又沈靜した空氣に忽ち波動が起つて、彼のロオレラインの曲が、微妙な音と色とを帶んで、鋭どく彼の耳を刺戟して來た。柳之助は是も聽覺の作用であると意識はしたが響いて來る音色が、蓄音機よりも猶明瞭であるので、彼は又其の不思議に驚嘆するのであつた。

彼は寫眞を捨て、虛心に復つた時は、唯だ丸髷姿のお種の肖像のみ眼に殘つて、廂髪の道子の姿も見えないし、ロオレラインの曲などは決して聞えなかつた。

柳之助は、此の怪しい形や、不思議な音色が、どうしてお種の寫眞に

對する時にのみ起るのかと考へた。そして一刻も早く夫れを眼の先から耳の穴から排ひ除けて了ひたいと考へた。けれども却々排はれなかつた。

柳之助は今日も、お種の寫眞に對して、其樣不思議な形を見たので、又聞いたので――

「どうも不思議だ。自分は恁んな奇怪な幻象を眼に見、不可思議な音色を耳に感ずる迄で、彼の女には刺戟を與られない筈である。成程お種さんに似た非常な美人だとは感じたに相違ない。ヴイオリンが上手だと感じたには相違ない。しかし其の一面に於いて、氣詰りで〳〵嫌な女だと思つたのも亦事實であつた。男を恐れずに勝手に口を開いては、笑ひもした物もを食べた。そして何處か女らしくない不謹愼な點もあつたので、自分は是を第二のお島としてうんざりしたのも、たしかに事實であつた。嫌な點と好きな點とをバランスにかけて見ても、何方が何方が輕いか、正確な分量を示現することの出來ぬ程度であつた。夫れに恁うお種さんの寫眞を通して、彼の女の美點のみ現はれて來るとは、實に不可思議である……。」

柳之助は起つて、陰欝な座敷の中をぐるぐる廻つて居た。

そこへ宿の女房さんが上つて來て、是は體でなく眼をくる〳〵廻したが、

「あの葉山さんが入らつしやいましたよ。」

と、如何にもおつかぶせた樣な聲で言つた。

「實に不思議だ？　どうも解らん？」

柳之助は、女房さんの言葉には、何等の交渉も有たぬと云ふ風に、仍且座敷の中をぐる〳〵廻つて居る。

呆れた女房さんの眼は、更に急激にくる〳〵廻つた。

柳之助の體も、更に急激にぐる〳〵廻る樣になつた。と思ふと、唐突に女房さんに對つて、

「上げて下さい……。」

女房さんは廻して居た眼を一寸睜つた時、

「もう上つて來て居るよ。」

鐵無地の背廣の上に、縞羅紗の外套を着て、左の手に鼠縮緬の服紗包を持つた葉山は、何時見ても變らぬ快活に、そして苦勞のなささうな顏に微笑を湛へながら上つて來た。そして火鉢の前にどつかり胡坐を組いて、ポケットから敷島の袋を出したが、自分と差し向つて坐つた柳之助をつく〳〵眺めて、

「また元の木阿彌だな。其の髯面はなんだい。髯面はよ……。」

「是はひとりで生へたのだ……。」

柳之助は貧乏搖ぎをして居る。

「髯に兩親があるものか。」

と葉山は笑つたが、

「生へたら綺麗に剃つておけば好いぢやないか。色男の價値が下りますよ。」

「でも面倒臭いから……。」

柳之助は、掌で一つ頤の邊りをずるりと撫でたが、

「先夜は御馳走だつた……。」

と思ひ出した樣に言つた。

葉山は煙草に火を附け乍ら、

「其代り、今日はひとつ君に驕つて貰う心算で來たのさ。什うだい。驕るのか驕らないのか……。」

柳之助はお安い御用と云つた樣な顏で、

「そりや驕るとも……大に驕るよ。何でも君の好なものを……此所ぢや駄目だが、今から何處へ行かう……。」

と、彼は早や起ちかけて居る。

「蓄生奴！　内々知つてるな……。」
「何をさ？　僕は何も知つとるもんか。」
「何も知らんが、嘘が三遍出たらう。」
「嘘が……。」
柳之助は解せない様な顔で、葉山を眤ッと見下ろしたが、
「僕は風なんか感きやせんよ……。」
と大眞面目である。
「御挨拶だね。」
葉山は是を獨で洒落にして了つて、クス〳〵笑つたが、軈て身を起して、
「兎に角、公園を散歩して、歸に上野の丸萬で飯でも食べやう。」
「君は上方料理が好きだつたね。」
「鹽があまくないから好さ……。」

「成程。君は飲酒家だからな。」
柳之助は何でもないことに感心する。
二人が下宿を出た時分は、もう五時が打つて夕方には間もなかつた。電燈や瓦斯の光が、町の兩側にはもう輝いて居た。二人は坂本警察署の前を左に、新坂の鐵道蹈切の處へ出た。野中の便所の様な番小屋に這入つて、小倉の洋服に毛絲の襟卷をした、五十許の汚い爺さんが鍋の中に石炭を燃やしてあたつて居た。二人は其所を通つて公園の方へ登つて行つた。そして思ひ合はした様に鐵柵に靠れて、眤ッと遠近の夕暮の街の景色を下瞰した。
淺草から下谷をかけた、そして吉原の果迄も一眼に連つた電燈は、深い水蒸氣に鎖されて、沖の海の漁火の様に見えた。別けて澄んだ天を劃つてぼかされた奥山のイルミネーションは、年中不斷の景色ながら、油繪のやうに綺麗であつた。風は無いが寒氣は身に浸みる様に人の膚を襲

ふた。

今しも車坂の車庫の前を、青い電火をポールの端に散して、獸の唸る樣な聲で電車が驅つて來た。此の電車が直ぐ下の坂本の通りへ曲らうとした時、葉山は寒むさうに身を悚めながら柵を離れて、

「驚見、君は或る女に惚れられて居るよ。」

（十二）

今迄で彼の不可思議な作用に就いて、絶えず心の中で考へて居た柳之助は、此の思ひがけない葉山の言葉に、自分の耳を疑ふ樣に驚いた。そして是もずつと柵を離れて歩き出したが、

「そんな……そんな馬鹿なことがあるものか。又僕を擔がうと思つて……。」

「いや、今日は擔ぐんぢやない。眞面目も眞面目も大眞面目なのさ。」

葉山自身も頗る眞面目な態度で言つて、

「實は今日も其の用件で來たんだが、どうだい、執心の女一人を救つて呉れないか。」

「だから僕は、女に惚れられる樣な覺えはないと云ふのに……。」

柳之助は咎むる樣に言つた。

「あつたら何する。」

「ある筈がない。僕はそんな機會をつくる場合にすら、出會したことがないのだもの……。」

葉山は意味あり氣に柳之助を見て、

「處があるから妙さ。」

「何時？」

「何時もないもんだ。もう忘れたのかい。」

葉山は是迄言つたら、如何な野暮な驚見でも、大概は氣が附きさうな

ものだとは思つたが、柳之助はそれでも一向覺えのない樣な、ぼんやりした顏をしながら歩いて居る。

葉山は揶揄ふのも張合がないと云つた樣な顏をして、

「十八日の晩さ。君はうちの二階で、家内に好く似た、而も家内より數等美人な女を見たらう。そして何とか言つた曲を聞かされて、君がひどく感心したぢやないか。彼の女さ……矢崎道子さ。君を想ふて居るのは……。」

「君は何を云ふ……。」

柳之助は先きには驚いたが、今度は呆れたので、しかし何だか胸も轟く樣なので――

「何を云ふとは酷い。實際なんだ。何時もの洒落ぢやないよ。」

「しかし彼の女は初會ぢやないか、たつた一度會つた位で、そんな馬鹿な……。」

「一度だつて惚れられんと云ふ規則はあるまい。十年交際つても、嫌なものは飽までも嫌、一寸見た許でも好きなものは堪らない程好さ。君なんかは、一寸見られて堪らない程好きがられた口だよ。」

葉山は靴の先で石塊を蹴つて、

「いや、打ち明け話をしないと解らないが、實は恁うなのさ。彼の晩君が歸つてから、道子は君に就いて、ひどく詳しく聞くから、僕は彼の男は、恁う〳〵した學歴を有つて、恁んな職業で、月收はこれだけあつて、實があつて、情があつて、深切で、思ひ遣りがあつて、其の上眞面目で、恁う〳〵だと、すこしはおまけもあつたが、大に君を賞めたてたのだ。處が道子の曰くさ。私はあゝ云ふ性質の人は大好きですわ。どうせ將來ハスを有つなら、鷲見さんの樣な方を有ちたい――てなことを言つて、ちよつと惡身をした奴さ。そこで葉山が曰くさ。そんなに想ひ込んだらどうだい奥樣になる氣はないか。また道子が曰くさ。何時でも行きます

わ、今夜からでも明日からでも……鷲見さんさへ御承知なら……でも鷲見さんに嫌やだと有仰られては、私は失望落膽して、ひよつとしたら死んで了はないとも限らないから、なまじひ言はずに置いて下さい――

――なんかは什うだい。僕は男に惚れた女を隨分見て知つてるけれど、道子ほど熱心なのは今度が皮切さ。」

と、彼は長々と語つたが、

「其の上明くる日からは、くよ〳〵物思ひと來て居る。君は見ないと眞度にしないかも知らんが、實際可愛さうな位だよ……そこで什うだい、執心の女を一人助けたと思つて、今迄の獨身主義を撤去したら……葉山誠哉一生のお願ひだ。」

「そりやいかん！　そりやいかんよ！」

柳之助はすこし昂奮の體で、恁う早口に言つたが、何やら頻りと考へ込んで居る樣子であつた。

「然う木片で鼻を去んだ樣なことを言はんでも好からう。すこしは何とか色のついた挨拶をしても……。」

葉山は面白くない顏附で言つた。

「しかし、僕はそれだけのことしか言はれんぢやないか……。」

「ぢや宜しい。處で何んかな、その今の君の言つた、「そりやいかん！」と云ふのは、道子を嫌やだと云ふのか、たゞし又獨身主義は狂げられんと云ふのか。どつちだい。」

「兩方だ……。」

「兩方……それぢや、君に聞くことがある。君はいつか僕に恁う言つたことがあつたね。僕には歡樂の世界と云ふものが全然知られない。僕はこんな暗い淋びしい生活をして、終ひには穴へ入つて了ふのだ。實に慘ない。如何かして明い日光に浴びることは出來ないだらうか――と。恐らく記憶に殘つてるだらう……。」

「そりや言つたよ。確かに言つた覺えがある。」

「ね、覺えがあるだらう。僕の今君に獨身主義を抂げろと言つたのは、即り君を明い歡樂の世界へ出さうと云ふ、準備の聲なんだ。君が獨身を主張してる間は、十年經つても二十年經つても、明い世界へ出ることが出來ないよ。」

「妻を有つたら、世の中が明くなるかな。」

柳之助は浸りした調子で言つた。

「明くなるとも、餘り明くなつて瞬しい位だらう。どうだい。物は試しだ。明くなるかならないか、ひとつ思ひ切つて妻帶してみたら……。」

「しかし、僕は妻が歿つた時、もうお前の外には決して妻を貰はん、一生獨身で暮すからと、佛の耳に誓言してやつたのだ。それを今貰はうと云ふのは、僕の良心が許さんから……。」

「良心が許したら貰はう氣だな。それぢや矢張り佛に對して不實な譯だ。何も今更獨身で通さなければならぬと云ふ必要もない。殊には、此の頃は谷中へ行つても、悲しくも哀れでも何ともないと言つてる程だから、自己の安全を謀る爲に妻を貰はう位の事は、易々たる決心で出來るのだ。又さう決心して愉快に此の世を送るのが眞度さ。すくなくとも人間の義務だ。さぞお類さんも草葉の蔭で、あゝ是れで辛つと安心したと悅ぶことだらう。ね。惡いことは言はないから、貰はうことにし給へ……。」

「……。」

柳之助はそれでも首を俛れながら、默つて歩いて居る。葉山は又言葉を續けて、

「それとも、君が君自身から暗い世界がすきで、强ひて其所へ這入つて、大に愉快を感じて居るなら、そして滿足を表して居るなら、僕は決して君に妻帶をすゝめはせんのだ。が、君は何時もそれを苦痛だ〳〵と言つてるだらう。煩悶してるだらう。それを親友の僕が、どうして默つて見

て居ることが出來やう。君に僕の心配を慮ると云ふ心があつたら、何とかひとつ決心して貰ひたいもんだね。實は、君に妻帶をすゝめやうと考へたのは、もう昨年の秋時分からのことなんだ。けれども、彼の時分は、君の煩悶も最中だつたし、迚も今は言つたところで無駄である。其のうちに諦めが附く時代も來るだらうから、其れまで待たう……恁う思つて遂ひ今日まで及んで了つたのだ。處がそれ道子が君に嫁きたいと言ふだらう。是は實に渡りに舟だと、僕はまあ、賴まれもせぬのに獨で氣を揉み出した樣な譯さ。君には却つて迷惑かも知らないけれど。」

と、葉山は得意の能辯を振つて、是れでも承かないかと云つた樣に、熱心に說くのであつた。

「迷惑どころか。感謝の言葉がない。しかし……。」柳之助は重い調子で言つた。

「しかし主義は枉げられんと云ふのだね。それとも女が不足なのか……

……一體君はどんなタイプの女が好きなんだ。假りに貰はうとしたら、好いか假りにだよ……誤解しちやいかんよ。假りにだから……。」

「君の妻君の樣な女が好いな……。」

柳之助は、すこしの躊躇もなく言つた。

「是は恐れ入るね。しかし彼女は僕と子迄なした仲だから、氣の毒だが進上は出來ないよ。如何に親友の君へでも……。」

「誰が貰ひたいと云つたのだ。君こそ誤解しとるよ。たゞ假へぢやないか……。」

柳之助は非常な問題にでも振れた樣な態度で言つた。

「はあ、さうか、假へなのか……。」

と葉山は輕く受けて、

「それに僞がなかつたら、道子なんかは望んでも得られぬ好緣ぢやないか。君もみて知つてる通り、家內に瓜二個で、そして家內よりも數等容

貌が好い。其の上君にはホの字と來てるだらう。貰はないのが嘘さ……

……。」

「しかし、彼の女は、君の妻君の樣に女らしくないよ。それに餘り深切でもなさうだ。」

「當つても見ないで何が解るもんか……君は一體、女に對しては非常に偏屈で、怖なびつくりで、其の上見憎い程疑つて居るが、それは僕が想ふに、君は生れて三十年來類さんの外は、まるで女の味を知らんのだ。いゝかい。味だよ……そこで其の味を知らないために、君は疑つたり、恐れたり、偏屈になつたりするのだ。すこし藝妓買ひでもやつて、女と云ふものを覺えると、今度のやうに煩悶もしないし、結婚についての決心なども鈍ぶらないのだ。いや話が飛んだ枝葉へ渡つて了つた。處で今言つた樣な譯だが、君はどうあつても、僕の忠告を容れて呉れんと言ふのか。僕は改めてそれを聞かう。君の返答如何によつては、隨分此方に覺悟がある……。」

葉山は此の覺悟と云ふ言葉に最も力をこめて言つた。

「覺悟と言ふと……。」

柳之助は不安さうに訊いた。

「それは說明の限りにあらずさ。君の返答次第では、消えて無くなつて了ふから……。」

「ちや、君し、僕が飽くまでも嫌やだと言つて拒んだら、君は如何するのだ……如何な覺悟をするのだ？」

「曰く絕交……。」

葉山は唯一句鋭く言つた。

「絕交……。」

柳之助は愕然として眼を睜つた。そして大地に足を釘附けにされた樣に、ひたと鵠立つたが、

「そりや酷い！　酷い！　酷い！　酷い！」

と、「酷い」を續けざまに言つた。

「何が酷い？　人が事をわけ條理を整し、千思萬考の上、君に妻帶をさせると云ふことは、何れの方面からみても、動きのとれない利益である と認めてした善意の行爲に對して、何等の反省もしない樣な人間は、ともかくも友人たるの資格がなからう。友人の資格のないものと交際を續けて行く必要も亦なからう。そこで絶交さ。君は酷だと恨んでも仕方がない。夫れが自然の順序だもの……。」

葉山は熱湯を呑む樣な思ひで言つた。

柳之助は到頭泣き出したのである。

流石の葉山も、何だか泣きたい樣な氣持になつたが、ぢつと堪へて、

「何んだ。君は泣いてるね。大の男が涙を滾ぼすなんて、みつともない。廢し給へ。」

と聲を優しくして、慰める樣な調子で言つた。

「君、一生の願ひだから、何卒僕に……二三日考へさして……考へさして呉れ給へ。君はそ……それ位の猶豫なら僕に與へるだらう……。」

柳之助は半巾で涙を拭きながら、濕つた顫ひを帶んだ聲で言つた。

「それは君の自由さ。二三日でなくとも、十日でも二十日でも關はんから、悠り考へた上で返答し給へ。……君さへ僕の忠言を容れて呉れたら、もと〳〵僕だつて、惡意で此んなことを言つたのぢやなし、其の場ですぐ又もとの親友になる許りさ。天下に一人しかない親友にさ……。」

葉山は氣持好ささうに言つたが、

「時に大分腹が、北山と來た。早く行つて一杯飲らかさうぢやないか。」

と柳之助の手を拿つた。

二人は東照宮前の石段を急いで下つて行つた。日はもうとつぷりと暮

れて居た。

（十三）

今夜は幸ひ天氣も好いし、久しく遠ざかつて居た活動寫眞を見に行かうと言つて、葉山家滯在の道子は、晩飯が過ぎると直ぐに、保と女中達を連れて、淺草の奥山まで出懸けて行つた。

留守番のお種は、獨り茶の間に坐つて、保の衣服を縫ひながら、歸りの遲い良人を待ち詫びて居た。

女達の居ない葉山家は、此の夜は沈み返へる樣に靜かであつた。今時分になればきつと初まる隱居所の謠曲も、今夜は不思議にも初まらなかつた。時々奥座敷のあたりで木鳴の音がしたり、天井板を鼠が驅け廻つたり、長火鉢の鐵瓶がちん〳〵沸つたりする音の外は、一切寂として何も耳に感ずるものはなかつた。

お種は平素忙しい體であつた。それが此うした靜寂な空氣の中にたつた一人坐つてみると、いつも思ひ出さぬこと迄で思ひ出さるゝのであつた。お種は種々のことを考へ初めたうちに、二六時中決して其の腦髓を去らなかつた、柳之助問題を最も長時間考へたのであつた。

良人は、會食以來未だ鷲見さんの意中を確めぬ樣子である。今夜あたり早く歸つて、鷲見さんへでも入らつしやれば好いのに、どうも呑氣すぎて困つて了ふ。また今夜は宴會かも知れない――

彼の晩の鷲見さんの樣子では、滿更望のない風でもなかつた。彼の偏屈な、人好のしない、初對面の若い女なぞには、絶えて口もきかれなかつ方が、ヴィオリンが上手だと言つて、妙に眼に光りを帶ばせて道子をお賞めになつた樣子では、たしかにお氣に召さぬ素振ではなかつた。何んだか今も眼に附いて居るやうだ。彼んなことが動機となつて、鷲見さんのお心が今迄とは變つて了ひ、そしてひよつとお貰ひになる樣なこと

があつたら、自分もどんなに安心するであらう。さうでないと毎日其の事許が屈托になつて、鶯見さんでなくつても、何だか世の中が暗くなつた樣に思はれる。それに良人は彼云ふ氣質だから、自分を何とも思つて居られない樣子だけれど、妻の身となれば、何だかそれでも後ろめたい樣な氣がされる――

お種は恁んな思ひに耽けつて、それから段々道子の方へ考へが及んで行かうとした所へ、微醉機嫌で良人は歸つて來た。

「何だか莫迦に靜かなやうだね。どうしたんだい。」

葉山は着換へもせずに、どつかり長火鉢の前に胡坐を組いたが、ふつふつ沸つて居る鐵瓶をとつて猫板の上に置き、寒むさうに首を縮めて、火箸でホドをほぢくり廻した。

「道子がみんなを連れて、活動寫眞を見に參りました。」

お種は恁う言つて、良人の顔を見たが、

「今夜はどちらでした。大相お早いお歸りぢや御座いませんか。」

「餘り早くもなからう。最う彼是十時だもの。」

「でも、二時や三時からみれば、未だ眞の宵の口で御座いますよ。」

「如何にも……お前さんは此の頃大分話せる樣になつたね……。」

葉山は掌で顏を撫て、怠るさうな欠伸をしたが、すこし口元に笑ひを含んで、

「今日は妙な所へ行つて來たよ。」

「私の好きな所へで御座いませう。」

「其の通りさ。今夜は感心に知つてるね。」

何時もの調子にも似ず、至極良人は眞面目で居るので、串談に言つたつもりのお種は、却つて不思議に思ひ、

「何方で御座います？」

と、眞面目に聞き返した。

「柳之字ぢやないか。」

葉山の方でも、何だか勝手が違つた樣な顏をして言つた。

「おや、然うで御座いましたか。私もなんだか、貴郎が餘り眞面目で有仰るんですから、變だと思つたので御座います。」

お種は微笑しながら言つた。

「俺も何だか變だと思つたが……此方は面白い。お前さんは左、此方は右、それで結構行逢ふつもりで居たんだね。」

葉山は大に笑つたが、

「實は會社の退けから、すぐ鷲見の方へ廻つてね、例の一件を說いてみたのさ。」

「どんな風で御座いました。」

お種は針を一寸胸へ刺して、良人の方へ向き直つた。

葉山はそれから、先程柳之助へした話の要領をお種に語り聞せて、

「そこでね。種々な方面から說き出してみたが、先生考へ込んで居る許で、一向埒があかないだらう。」

「どうしても嫌だと有仰るのですか？」

「まあさ。默つて聞くが好い。そこで仕方がないから最後の虎の卷を出したのさ。」

「虎の卷と有仰ると……。」

お種は聞き咎めた。

「どうして左樣物忘れが早いだらう。お前さんは必然茗荷畑で生れたね。そら絕交の一件さ……仕方がないからそれを出したのさ。すると先生非常に驚いて、酷い〳〵を連發したつけが、遂ひにやシク〳〵泣き出されてよわつたよ。」

「まあ、お可愛さうに……。」

お種は一寸眉を顰めて、

「それで結局どうなすつたので御座います。」

「結局は日延べと來たのさ。二三日考へたいから、どうか即答は許して呉れと、眞劍になつて頼むだらう。此方も餘り可愛さうだつたから其のことにして、歸りに丸萬で一杯飲つて別れて來たんだが、先生今夜は又大煩悶の體だらうさ。彼の上驚見に煩悶させるのは可愛相でならないけれど、普通一遍の注告位ぢや、先生には全く糠に釘だからね。」

葉山はお種の汲んで出した湯呑をとつて、香りの好い番茶を美味さうに飲んだが、

「何れ今度は、何とか音が出て來るだらう。」

お種は帶の間へ手を挿んで、昵ッと電燈を見詰めながら考へて居たが、聽て良人の顏を見て、

「矢張り道子がお氣に召さなかつたと見えますね。何だか、先夜の御樣子では、大相よささうにも思ひましたけれど……。」

「さあ、それは流石の俺も早合點の大呑込みさ。矢張り油蟲は占めなかつた……。」

二人は顏を見合はして笑つたが、やがて葉山は眞面目になつて、

「勿論獨身主義は抛げられんと云ふ人間だから、天で驚見は女のことは言はなかつたが、それでも如何な氣持で居るかと思つてね、若し假に貰はうとしたら、どう云ふ風の女が好いのかと訊くと、君の妻君の樣な女が好いと言ふのさ。それぢや道子は良緣ぢやないかと云ふと、彼の女は君の妻君の樣に深切でなささうだと來たのさ。何しろお前は餘程思はれて居るよ。」

「まあ、其んなことを有仰つて……。」

お種は良人の手前　面目ない樣な顏をして言つた。葉山は何も意にかけぬ樣子で、

「驚見は彼んなことまで平氣で云ふ位だから、例の寫眞の一件だつて、

僕は全く知らんものと思つて居るらしい。」

「此の間の晩のことは如何で御座いませう。」

「あれも大丈夫だよ。彼の謎が解ける樣な捌けた人間だつたら、今日はすつかり俺が遊ばれたのだが……。」

葉山は恁う言つて考へたが、

「何しろ餘程胸に感へたらしかつたから、ひよつと決心を据ゑて、それぢや貰はうと出られたら、實は葉山誠哉げやふんと參るのだが……道子は如何だらう。」

と頗る不安さうに訊いた。

「今日も、お晝過ぎに種々な話しが出ましたけれど、道子は好きでも嫌やでもなささうで御座いますよ。何だか窮屈な方だけれど思ひ遣が深かさうよ……なんて笑つて居りました。」

とお種も笑ひながら言つた。

「聊か心細い譯だが、いざ鎌倉と云ふ場合にや、滿更顏の色が蒼くなる口でもないね。それぢやまあ宜しい……。」

「あら。もう歸つて參つた樣ですよ。」

お種が聞き耳を立て、眼を玄關の方へ遣つたとき、何やら道子の笑ひ聲がして、四人はどや〳〵茶の間に入つて來た。

「只今歸りました。」

と道子は、輕くお頭禮をしたが、莞爾笑つて葉山に向ひ、

「兄樣は、今し方歸つて入らしやらなくつて……。」

と何やら意味ありさうに訊いた。

「さうだ。今歸つた許りの處さ。末だ物の二十分とは經つまいよ。」

「では、矢張りさうだわねえ。」

道子は、自分の後に坐つて居る女中達を顧みて言つた。

「なんだい。歸る早々人を引捕へて、さうだとかさうでないとか言つて

……。」

葉山の問ひに、道子は何か云はうとした時、早やお種に馬乘りになつて居た保が、

「今おとうさんが電車に乘つたよ。ね、おばちやん！」

と然も手柄顔に、眼を大くして言つた。

葉山はそれで讀めたと云ふ顔をして、口元に笑ひを含んだが、

「何處で見たのかい。」

と道子に言つた。

「上野の公園下の處で、電車に飛び乘りをなすつた方が、何だか兄さんにそつくりだつたから、それで……。」

「おや、私はすつかり淺草と許り思つて居たけれど、三橋の活動寫眞へ行つたの……。」

お種は道子に言つた。

「えゝ。電車の中で面白い廣告を見たので、それで三橋の方へ行くことに決めて了ひましたの……歸りに博品館へ行つて見やうと、線路を向へ越すとねえ、揚げ出しの前から、驅けて入らしつたのが、どう見ても兄さんらしかつたので……。」

「實は俺の方でもお前さん等を見つけのたさ。餘程一所に歸らうかと思つたが、其の時はもう電車に乘つたあとだつたから、其のまゝになつて了つたが、何だか三人の後姿は莫迦に好かつたよ。飼主の聲を聞きつけた家鴨で御座いと云ふやうに、大いお臀を振り立て〳〵……。』

葉山は笑ひもせずに鼻をうごめかしながら言つた。

お種も女中達もみんな笑つた。

「あら、あんな酷いことを仰有つて……嘘ですわ。嘘ですわ。兄さんは全く御存じなかつたわ。ねえ、お花……。」

道子も笑ひながら言つた。

「はい。然うで御座いますよ。檀那樣は始終横の方ばかり御覽なすつて入らつしやいましたから……。」

葉山は猶も眞面目な顏で、

「そりやきつと、互ひつこだつたらうさ。俺が見た時分はお前の方で横を向いて、お前の方で見た時分には、生憎俺が横を向いて居たのだらう。それぢや一生涯會ひつこはあるまいぢやないか……。」

檀那樣のお口には迚もかなひませんとお花は言つた。

それから土產の羊羹を切つて、紅茶を飲んで、今夜見た活動寫眞の噂などをして、十一時すこし廻つた時分に、皆んな寢床に入つた。

（十五）

今日音が出て來るか、明日音が出て來るかと、葉山は起きる時も寢る時も、乃至會社への往復の途中でも、始終柳之助のことを考へて居るのであつた。

柳之助は彼の夜から、更に新らしい苦悶を抱く人となつた。葉山の忠告を受けない以前は、それでも怠い懶い體に無理に勇氣を附けて學校へは出勤して居たのであつたが、今は最う小便に起つのすら、何だか憶劫で堪へられない樣な氣がした。で、學校へは、病氣の爲め二三日は欠勤するからと云ふ届書を出して、彼は哼つ〳〵と溜息を吐きながら、身を倒して葉山への返言を苦考して居るのであつた。

柳之助は葉山と交際してから、彼の夜程熱烈で、而も昂奮した態度で、あんな問題を彼から言ひかけられたことはなかつた。それだけ柳之助の胸は怪しく轟いたのであつた。それだけ彼の腦髓は刺戟され、それだけ彼の心臟は恐怖の痕を印されたのであつた。

何時もならば、可也重大な用件を物語るにも、二つや三つは洒落も諧謔も交つて居るものを、彼の夜に限つて笑ひ顏一つしなかつたのを見れ

ば、何しろ葉山も決心に決心をして言つたことに相違ない。葉山の忠告も實は條理のあることで、柳之助は夫れを一々聞く毎に、息の音を止めらるゝ樣な思ひはしたけれど、又辯解もし反駁もしたい樣な節も折々はあつた。けれども柳之助には、夫れを言ふだけの勇氣はなかつた。勇氣はあつても言ひ出すだけの辯舌は有たなかつた。彼は唯だ涙で應へて、其の攪亂した顏をすこしは鎭定させたのであつた。

彼は下宿へ歸つて、寢床へ横はつてから、獨りで問ふて獨りで應へた。そして大に苦しんだのである。

彼の考へのうちには中心點が二個あつた。「心を決して道子を貰つて了はうか」と云ふのは其の一個で、「致方がないから葉山に絶交されて了はうか」と云ふのは他の一個であつた。

這の二個の中心點が、何方も動きのとれない力のあるもので、時々猛烈に衝突して火を發したり、徐ろに右左に岐れたりした。そして柳之助は、其の何れかの一個を攫んで、他の一個をば物の美事に破壞して了ひたいと慌つたが、どうしても其の甲斐がなかつた。

自分は天下の孤獨である。類さんが歿くなつた當時から、暗い淋びしい世界に浸み入つて了つたけれど、それでも心に稍平和の光が見え初めたのも、即り一人の懷しい誠心の友葉山ある爲めである。葉山の賜物である。自分は此の友の忠告を卻けて了つては、誰か再び自分の樣な性格の人間を愛して呉れやうぞ。葉山なればこそ永年變らず胸襟を披瀝して呉れたのだ。葉山は自分にとつては賴む木蔭である。今其の賴む木蔭から、自分は遠からうか遠かるまいかと迷つて居るのだ。

遠ざかつた結果は如何なる、葉山の熱の輝いた顏は見られなくなつて了ふ。葉山の情の動いた言葉は聞かれなくなつて了ふ。勿論葉山の闘は跨げなくなつて了ふ。お種さんの顏も見ることが出來なくなつて了ふのだ。類さんは全く滅んで了つたから、如何に藻掻いても悲しんでも、現

在では逢ふことが出來ない。葉山とお種さんは現在に生きて居る。逢はうと思へば何時でも逢はれる。其の逢はれる人と強ひて別れて、逢ふことが許されないで居る苦痛は、滅亡した類さんに逢はれぬ苦痛よりも猶苦痛である。自分は此の苦痛には、到底堪へられない――生きて行かれない――。

然らば思ひ切つて道子を貰つて了はうか。其の結果は如何なる。堅い信念と拔くことの出來ない決心とを以て築いた、自分の獨身主義を、其の基礎から滅茶々々に破壞して了はなければならない。死者に對する誓言を撤回しなければならぬ。自分の心で拵へた獨身主義は或は狂げらるゝかも知らないけれど、死者に對する誓言は永遠に――自分の生命の有る限り取消すことは出來ない。それを我から破つて、道子を貰つた處で、自分は決して平安な生活は出來ない。出來る譯のものぢやない。唯だの一日でも。長閑にのんびりと送ることが出來ない。それは明鏡の前に立つた自分の姿と同じく明かなことだ。其の上彼の道子と云ふ女は、葉山の賞める樣な心の美しい女ではない。彼の女は必然虛榮心が強い。そして贅澤で我儘であるに相違ない――尤も顏は自分の好なお種さんに似て、非常な美ではあるが、其の美を以てすら、恐らく彼の心を磚彩して了ふには足りはすまい。即り道子は第二のお島だ。此の第二のお島は、決して夫に溫順ではない筈である。自分の如き性格の人間は、必然彼の女の臀に敷かれて、年中首も擡らぬ苦痛しい生活を送るに相違ない。精神的にも物質的にも、彼の道子を自分の妻に貰うと云ふことは、到底許されることでない。苦痛を貰はうのである。煩悶を買ふのである。悲哀を嫁るのである。自分は彼の女に對しては、寧ろ非常なる恐怖を感じる。しかし這の恐怖と鬪つて、彼の女を貰へば、自分は懷しい葉山やお種さんを得ることが出來るのだ。葉山やお種さんを得ると云ふことは、自分の淋びしい暗い慟ない生活には、絕大の光明である。慰藉である。道子

を貰つて内では更に多くの苦しみをうけ、葉山やお種さんを外に得ては慰められる……何だか自分はそれで滿足したいやうな氣もする。けれども〳〵――

柳之助は恁んな孟浪のない考へを抱いて、大に迷ひ苦しんだのであつた。彼は迷ひに迷ひ苦しみに苦しんで、其の深底に得た結論は、葉山と絶交しないで道子を貰はぬと云ふことであつた。彼は此の結論を得た時、自分ながら自分の決斷力の足りないのに呆れたのである。

柳之助が苦心慘澹して握つた結論は、實に彼が葉山から忠告を受けた當夜の初志であつた。

柳之助は最うむしやくしやして來た。體に附いてるものは、髪の毛で衣服でも、何でも拐つて放り附けたい樣な氣がした。頭は岑々痛んで熊蜂の巣にでも突き當つた樣な唸りをあげた。心臟は皷動して早鐘でも打つ樣に感じた。自憤て悶えて、幾度も〳〵咈つ〳〵と長吁を吐いては、

「這んなことが、毎日毎夜續くやうだつたら、自分は確かに發狂して了ふ……。」

恁う神經的に口走つた。そして急に俄爾りと起ち上つて、例の標本箱から葡萄酒を出して、續けざまに三四杯呷つた。

彼の險しい眼は、妙に凄い光澤を帶んで、瞳の周圍には、赤い絹絲の樣な線が無數に見えた。

彼は思ひ切つたと言ふ樣に、いきなり机に對して、約五六枚程の手紙を夢中で書いた。そして夫れを郵便で葉山へ送らうと、懷中へ捻込んだ儘ぷいと下宿を出たのである。

柳之助の下宿を出たのは、もう夜も九時には近かつた。彼は足に任せて、何處へでも行かうと思つた。

彼は先夜、葉山と連立つて歩いた上野の山の路筋を、殆んど無意識的に辿つて行つた。

此の夜は北風が可也吹いて、外套も纏はなかつた柳之助の身は、刀の刃で削ららるゝ樣な痛さを感じた。空は紺碧の色に澄み渡つて、金剛石を鏤めた樣な無數の星は、その神祕めいた晃きを、底暗い、魔の息でも通つて居る樣な森の頭に落して居た。無論白銀の樣な月も輝いて居た。

柳之助は此の月に照されながら、黑く長く地上に印した自分の影と伴に進んだ。彼が止まれば影も亦止つた。彼が歩き出せば影も亦歩いた。

「吁。影だ。影だ。影程眞實なものはない。自分と行動を伴にして、聊かも詐らず欺かざるものは影だ。自分が滅亡すれば、影も亦滅亡するのだ……。」

柳之助は何時か忍池の畔に出て居た。

辨天の燈明は　靄の中から夢の樣に漏れて見えた。池の蓮は月の光に暎つて、無數の金龍が動いて居る樣にも見えた。藍染川の泥土が押し積つて、觀月橋で縱斷した池の半分は溝の樣になつて居た。其の溝には鈍す黑く枯れた蓮の葉が狼藉して、鴨が寒むさうな聲で鳴いて居た。

「東京の名所も、恁うして滅亡するのだ。」

自働車がけだたましい音響を發して、柳之助の袖を掠める樣に驅けて行つた。

彼は此の音響を聞いた時、はつと我に返つた樣な氣がした。そして上根岸から此の池の端まで、如何辿つて來たのか、若しくは途中で如何なことを考へつゝ來たのか。彼の頭には明瞭な記憶を存して居らなかつた。恰で夢の中を歩いてきた樣な心持がした。柳之助は自分の精神が如何かしてるのではないかと恐ろしくもなつた。

彼は又池の端を向へと進んだ。揚出しの前の板橋を渡つて突き當ると、左りの方は電車通りで、人が絡繹通つて居た。辰燕張の浪花節を唸つて、柳之助の前を池の端へ拔けて行く若者もあつた。「柳」のさゝはりを語つて行く外套の紳士もあつた。苦勞のなささうな人、呑氣さうな人――柳之助

の眼には、多くの人がさう見えるのであつた。

彼は意味もなく路を左にとつて、藍染川の邊を遡つて行つた。そして二三町行つてから更に又左の露路へ入つた。

這の町には、御神燈を軒にぶら下げた、藝妓屋や待合茶屋が櫛の齒の樣に並んで居た。皆何れも雨戸は閉めて居るが、下から二階まですつかり電燈の光が滿ち渡つて、眞猫らしい家もあつた。艶いたはしやいだ樣な聲で、客と高話して笑つて居る女もあつた。人の心も情をも誘る樣な粹な音〻に、自慢らしい聲で海曇寺を唄つて居る藝妓もあつた。もう十時に間もないと云ふ刻限に這の町許は未だ眞の宵の口であつた。

不知この町に足を蹈み入れた柳之助は　路の中央に佇つて、眼を睜つてあたりを見ながら、非常な藝妓屋だなと呟いた。彼はすぐに昨年の春時分、葉山に連れられて、唯た一度此の町の內容に就いて經驗したことのあつたのを、古い記憶から喚び起した。何でも彼の時分は　柳之助は

這う云ふ町や這う云ふ町の中に棲息して居る女などをば、唯だ汚ない輕浮な劣等なものとして侮蔑した。そしてそれを慕つて通つて來る、男の心理狀態を怪み疑つた程の君子人であつた。が、今夜の柳之助は不思議にも然うでなかつた。心に何の苦惱もなく煩悶もなく、唯だ愉快氣に飲み且つ唄つて居る、彼等の放縱な生活がわけもなく羨しいやうに感じられた。それと同時に、世間には必然自分と同じ樣な境遇にあつて、其の遣悶排鬱の手段として、恁う云ふ場所へ通て來る男もあるに相違ない。恁う云ふ場所は、或はそんな男を慰むる、一つの歡樂場として設けられたのかも知れない。酒を盛に呑んで、藝妓の唄を聞いて、夫れで此の苦悶が果して慰め得らるゝならば、自分も酒を呑み、藝妓をも揚げて騷いで見たい——

柳之助は恁んなことまで考へたが、勿論自分では上る勇氣はなかつた。彼は人通の多い廣小路の方へ出やうと思つて、此の露路を曲りくねりし

て歩いたが、不圖ある藝妓屋の軒下のところで、今しも角を曲つて此方へ歩いて來る、二重外套に鼠の中折帽を戴いた一紳士と行逢つた。月の夜ではあるし、軒の電燈が明くはあるし、互ひに其の顏を明瞭に見交はすことが出來た。

顏を見交はした二人は、思ひ合はしたやうに驚いて其處に佇止つた。

「やつ！驚見君！」

對手の紳士は、酒臭を吻つと吐いた。

「桃澤君！」

柳之助は眼を睜りながら、恁う頓狂な聲で言つた。

這の桃澤と云ふ紳士は、三十九年卒業の理學士で、而も柳之助の職を置いて居る物理學院の講師であつた。非常な酒豪で大變な遊び好きで、其のくせ性質は至つて疎放であるが、業務に熱情があつて、講義が上手で、生徒のうけが莫迦に好かつた。柳之助は此の男を、同僚中でも優物

として、平素何に彼に相談をかけて居るのであつた。

桃澤はにや〳〵笑ひながら、柳之助の方へ近づいて來たが、銀の把手のついた太いステッキを大地に丁とさして、

「どうも驚いたね。君の樣な君子が、恁う云ふ場所へ出入りするとは……全く青天の霹靂以上だね。」

「誤解しちやいかんよ。君は僕を誤解しとるよ。僕は今池の端まで散歩に來て、不知こんな所に這入つて了つたが、是から廣小路の方へ抜けやうと思つとるところだ。」

柳之助は眞實を告白した。

「嘘だよ。そりや大嘘だよ。僕だつて君、同じ穴の狐ぢやないか。何にもそんなに眞劍になつて吻疏せずともものことだ。本來同族にそんなことを秘密にする必要はないよ。」

桃澤は柳之助の言葉を、天から信じない樣子で、恁う打ち消す樣に言

つたが、

「しかし、病氣屆を出して置いて、恁う云ふ處へ入り浸つてるなどは、流石の僕も驚くね。君は見ると何も病氣らしくないぢやないか……。」

「いやその病氣と云ふのは……例の不眠症の再發と頭痛なんだ。今夜も床に臥せつて居たが、何だか堪へられない氣持がされたので、すこし風に吹かれてみやうと思つて……。」

「しかし、風に二種ありさ。今夜の樣な北風と艶めかしい風と……君は疑ひもなくその艶かしい風に吹かれやうと思つて來たのだらう……。」

桃澤は飽くまでも、獨で柳之助をさゝだと極めて了つたが、

「いや、そんなことは什うでも好いが、ひとつ今から伴合つて呉れ給へ。實は僕もね、今夜新戚の轉宅祝へ招ばれての歸りだが、此處を通ると急に醉が醒めた樣な氣になつてね、もう一つ熱い奴を引つかけて行かうと、それで野心を起したのさ。決して長い手間はとらせないから、相伴つて呉れ給へ。君と此所で出會したのは恐らく天の賜だらう。さあ行かう！」

と困つて居る柳之助の手を拿つて、無理に引立て行かうとした。

「君の厚意は有難いが、今夜はどうか許して呉れ給へ。頭が痛くつて致方がないから……。」

柳之助は行くまいと拒んだ。

「頭が痛いなら猶更結構、此所は頭痛膏よりももつと効驗の好い藥だ。先刻御承知だらうが、まあ上つて見給へ、けろりと直つて了うから……。」

柳之助にもすこしは葡萄酒の効目があつたが、對手の桃澤には大分酒の氣が廻つて居るので、柳之助は幾ら許して呉れを連發しても、桃澤は決して其れには萎まなかつた。そして益す柳之助を引き立てるのであつた。

此の物音を聞きつけて、お茶を挽いて居た若い藝妓や半玉などが、格

子の隙から覗いて、キャッ〳〵と笑つて見て居るので、柳之助は非常に極りの悪い思ひをした。そして什うかして外して逃げたいと、種々あせつて見たが矢張り駄目であつた。そこで柳之助は又考へた。

どうせ追れられぬ破目になつたら、酔ひ潰れる迄酒を飲んでみやう——

——恁う咄嗟の間にふいと氣を變へて、

「ぢや、行かう。此袖を離し給へ……。」

と、不退轉の大勇猛心でも發起した樣な態度で言つた。

（十六）

桃澤は磨硝子に「しき島」と書いた、軒燈のついてる門を入つて、氣取つた植込を右に、御影で甃むだ敷石の上を渡り、突き當の玄關に差しかゝると、客ありと見てとつた、赭顔の年增の婢——茶縞銘撰の綿入に黒襦子と縞博多の腹合帶を締めた、澁い服裝したのがアタフタと出迎へて、

「おや、桃澤さん！」

と驚いた樣な風情をしたが、莞爾笑つて、

「お門違ひぢや御座いませんか……。」

「いや、確かに此處だと思つたが、それとも違つたのかな。さう言はれてみると什うも變だ！」

桃澤は嫌に生眞面目な顔をして居るので、

「何が變で御座います。」

婢もちよつと釣り込れて斯う訊いた。

「なにさ。彼の時分は、今夜のやうな、李の化物が出迎へなかつた筈だと云ふことよ。」

「お巫山戲なさいよう……。」

婢は手を揚げて打つ眞似をしたが、其の手で直ぐに外套と帽子を受け取り、ぴか〳〵光つて辷りさうな廊下を、雪のやうな白足袋で、驅け出

すやうに歩いたが、間もなく戻つて來て、

「さあ、お通り遊ばせ！」

と、嫌に「遊ばせ」に力を入れて言つた。

桃澤はふんぞり返つて、

「許せつ！」

柳之助は先程門を這入る時分から、何だか此の待合茶屋へは、是が初回でない樣な氣がした。門燈に書いてある「しき島」の文字や、植込の模樣や、御影の敷石の具合や、出迎へた女までが、何だか一度見た樣な氣がされてならなかつた。

夫れも道理、此の「しき島」は、昨年柳之助が葉山に連れられて來て、姫松と云ふ藝妓を見せられたり、西洋料理を食べたりした、其の懷想多い待合茶屋であつた。

柳之助は遇然にも、今夜又桃澤に連れられて其所へ來たのであつた。

彼が斯う氣が附いた時、もう二人は奥まつた小意氣な六疊に通されて居た。

床の間には、無落款の狸の尺八の幅が懸つて、其の前の籐の手籠には、半開の梅の枝が投げ入れにしてあつた。

座敷の中央には、火の氣のない唐津燒の火鉢が据ゑてあつて、其の傍には、更紗紬の座蒲團が二枚、恰も客待顔に――

「非常に欝ぎ込んで了つたね。未だ火は來ないが、まあ坐り給へ。」

桃澤は柳之助を顧み乍ら、どつかりと蒲團の上に胡坐を組いた。柳之助は默つて同じ樣に胡坐を組いたが、物思はし氣な顔をして、眤と天井の電燈を見詰めつゝ、年中癖になつてる貧乏搖を初めたのである。

「しかし、人間と云ふものは、實に見かけによりないものだね。君の樣な道德屋さんが――尤も表面計であつたが――こんな所へ出入りしてるとは、全く思ひがけなかつた。僕は今夜君に據つて、初めて人間全體の

秘密を遺憾なく暴露してやつたやうな氣がする。」

桃澤は袂からマッチを出して、卷煙草を喫かしながら言つた。

柳之助は然も五月蠅さうに顔を顰めて、

「だから、僕はさつきから、幾度も〳〵君に辯解しとるぢやないか。それでも君は僕を信ぜんもんだから……。」

其の時、先きの婢が臺十能に炭火を運んで來て、火鉢の灰を平し乍ら、今更不思議さうに柳之助の顔を眺めて居たが、

「あの違つたら御免下さいまし。貴郎は昨年の春時分、葉山樣と御一所に、此家へ入らしつた方ぢや御座いませんか？」

と、是は又頗る改つた調子で訊いた。

柳之助は內々此の女の眼附きを先程から甚く恐れて居た。そして場合が場合だから、お久振などと言はれては、然うでなくつてさへ疑つて居る桃澤の手前、太だうしろめたい譯である。どうかして此の婢自分を

見忘れて居て呉れる樣にとはら〳〵して居たのであつたが。果せる哉婢の眼瞳には、彼の顏が明瞭でない迄も宿つて居た。そして御叮嚀にも葉山と云ふ名前までも露呈れてみれば、本來嘘は大嫌ひの柳之助たるもの、

「それは人違ひだ」とも言はれなかつたので、大に恐縮の體で居る顏を——とは知らない婢の方では、的切知らばくれて居る者と許り合點して、

「でせう。何しろ餘りお久し振だから、不知お見それ申して。」

と莞爾りした。

「それ見給へ。隱すより現はるゝはなしだ。もう駄目〳〵。化の皮がすつかり剝げつちやつた。」

桃澤は痛快さうに笑つた。

婢はすつかり讀めた顏をして、

「どうもお氣の毒樣！」

と柳之助の方を覗き乍ら笑つた。

「早く酒を飲まうぢやないか。」

柳之助はてれ隠しに恁んなことを言つた。

「はい唯今！」

婢は更に驚いた樣に柳之助を見返したが、彼の野暮天もお酒の催促などを言ひ出すからには、すこしは道樂の修業も積んで居るだらう――と心に可笑しく思ひ、一寸調戯てみたくなつて、

「今夜は西洋料理は如何で御座います。それから羽の生へた猫も、聘ければ飛んで參りますよ。」

とクス〳〵笑つた。

「莫迦な……。」

柳之助も致方なしに苦笑した。

「何だか曰くが有りさうだね。後學の爲に聞かして呉れないか。」

桃澤は合點が行かぬと云ふ眼附をした。

「どうして〳〵玉手匣の二重封ですとさ。却々其んなお安いこつちや開けられません。ねえ貴郎。」

婢は柳之助の方へ突き出した願を桃澤の方へ向けて、今度は眞面目な調子で、

「誰に致しませう。」

「泣黑子が好からう。」

「彼の妓も、此の頃ぢや羽が生へてるから、今時分聘けてやつても明いてるかしら……。」

婢は聊か不安の體であつた。

「それが駄目だつたら、今夜はまあ李のお酌で我慢するとしやう。」

「あれまた彼麼惡口を有仰つて……化けて出ますよ。」

「季節でもないのに、水菓子屋が繁昌するだらう。」

と桃澤は大口開いて笑つた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

其の翌くる日の夕方であつた。葉山は會社から退けて歸ると、郵便が參つて居りますよと、お種の手から、菊の花をすかしに見せた、小形のハイカラな狀袋を受け取つた。

葉山は差出人の、梅田松之助と書いてある筆蹟を見た時、はつとした樣な顏をしたが、傍で苦笑しながら、良人の樣子を吟味でもする樣な眼付で見て居たお種の方へ、一寸眼を遣り、故意とらしく顏を顰めて、

「また御足勞を願ふだらう。嫌になつて了うな……。」

と獨言のやうに言つた。

「會社にでも、關係のあるお方なんですか。」

お種は下腹がよれる程可笑しかつたが、一生懸命に堪へて言つた。

「さうだ。保險金の一件でね。」

「開いて御覽なすつたら如何で御座います。」

「なに恁んなもの、見なくとも釋つて居るさ。」

葉山は件の手紙を皺苦茶にしたまゝ、ぐいとポケットの中へ捻ぢ込んで了つた。

「御覽なさらなくつても、ちやんと貴郎のお胸に應へが御座いますんでしやう……。」

お種は恁う言つたがぱつと顏を紅めた。平素恁う云ふ皮肉などは、却却出さうとしても、喉に塞つて舌が堅くなつて埒の飽かなかつたものを今日に限つて何の苦もなくするりと出たので、一つは痛快にも感つたしまた何だか不謹愼いことを口走しつた樣にも感じたので――

恁んなことが洒落の端緒となつて、此の場で手紙を開かれやうもんなら、又お惚けを聞かせられたり、思はせ振りを言はれたりして、兎角徒爲な時間も潰ぶさなければならない。夫れを隱して出されなのいが結句樂である。でも良人のことだから何とも解らない――お種は恁うも思つ

て、急に茶間から起ち上つて、用もないのに臺所の方へ驅け出す樣に去つて行つた。

葉山は其の後姿を眤然と視て居たが、

「へん。矢張り知つて居やがらあ……。」

とペロリと舌を出した。而して是も急用でも思ひ出した樣に、アタフタと階子段を上つて二階へ行くのであつた。

葉山は欄干に腰をかけ乍ら、未だ全く暮れ切らない灰色の光線で、例の手紙をトロケさうな眼附をして讀んだ。

手紙は馴染の深い姫松と云ふ藝妓から來たのであつた。初の方には、此の頃颯張り鼬の道を極め込んで了つた葉山に、散々に恨みを述べ、若しや御病氣ではないかとも案じられ、他のお座敷へ出ても、絶えずそれが氣にかゝつて仕方がない――と言ふのが其の中程であつた。終りの方には、昨夜十一時時分に、しき島から口が聘つて行くと、お客と云ふのは實に思ひがけない方で、吃驚して開いた口が塞らなかつた。其のお客は貴郎のことを好く知つて居て、何時か葉山君が見えたら、此品を渡して呉れと、私が賴まれたものがあるけれど、郵便ではお届けの出來ないものだし、然ればと言つて私が直接に持つて參るのも變だし、今晩あたり御用がなかつたら、お遊びがてら、其品を取りに入らしつて下さい。座敷を斷つて待つて居るから――と云ふ意味を書いてあつた。

葉山は讀み終つたが、平素の招出と違つて、何だか實があるやうにも思へた。そしてお客と云ふのは誰だらう、俺に渡して呉れと賴んだ品は何だらうと、古い友人や、業務上の知己などの名前を、一々帳面でも繰る樣に胸に數へ初めたが、却々それらしい人の名前は考へ附かなかつた。

「何は兎もあれ、これから直ぐに推參のこと……。」

葉山は微笑しながら下へ來ると、茶の間には最う食卓を据ゑて、銅壺